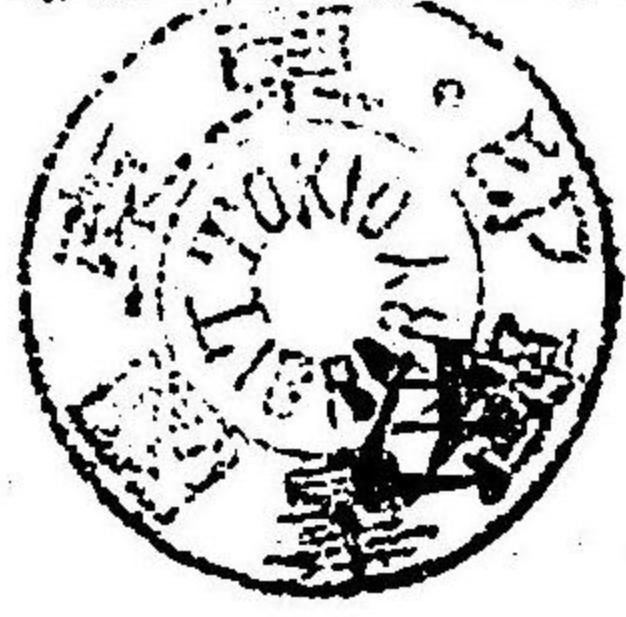


特21  
973

明治二十年一月十七日内務省交付

故日修聖人著

の道志るべ 第壹



教勵會本部

緒言

左に掲載する法の道しるへといふは故日修聖人の某優婆塞に向ての御物語を或弟子の筆記せしものにて既に年を経たる間傳寫展轉しければ或ハ文字の誤脱もあるらんその記者の注意にて一二の附言をなしたれども決して原の意に違ふ事あり希くハ看客其の意を察せよ尙一覽の後徒に丙丁の童子に附與せず窓前に留置復讀翫味し給は、稍佛教の大意即本宗主義のあるところを知見せらるゝに幾からん蓋し法門無盡あり一二の小冊争てか佛教の淵底を探り盡さん乞ふ之に安住するあく之を階梯として漸々

本門の深義を見聞し遂に五百由旬の高所に登り給人事を契す

明治十九年十二月

本成寺派  
教 勵 會

法の道あるべ大意  
第一に因果を明して發心の本とすることはこれによりて邪を捨て正に歸せ(捨邪歸正)せざるは皆因果の理をしらざるによる(しむる爲の故に)偕て因果の理を知んと欲せば須く一切衆生の過現未の三世に輪廻(十二因縁)率連して惑よ

り業を起し業より苦を生じ以て六道に廻生すること猶ほ車輪のごとしするの相を識べき故に第二に惑業苦を論す既に惑業苦展轉果を感ず善惡二報の生處あかるべからず故に第三に六道の相を辨ず既に六道因果の理を知て之を修するに懈怠を戒しめ精進に行せしめん爲に第四に無常を喻す已に因果輪廻の相又達して生死無常の苦を知れば則上智と下愚とを擇ます佛法に歸せざるべからず然るに佛法萬差にして優劣を辨へがたし故に第五に五時の(五時とは釋迦如來五十年の説法を五つに分る時五時の名目を立つ)次第を示して最上乘を識らしむ然も傳道の諸師蘭菊美

を擅はしりにして是非せひ分わかち難たし故ゆに第六だいろくに諸師しよしの異解いげを標ひょうして  
 彼の非圓ひえんを驗あきらむ然しかも本迹ほんじやくを了りやうせざれば法華經ほっけきやうを讚ほると雖い  
 も還かへりて法華經ほっけきやうの心こころを死そとふ故ゆに第七だいななに宗祖しゆその正義しやうぎを尋たづねて  
 題目肝要だむくわんようの旨ねがをしらしむ若もし解行かいぎやう已すでに勤つとぬれば三障さんぢやう四魔しよま  
 紛然まごとして兢きき起おこる故ゆに第八だいはちに修行しゆぎやうの注意ちゆいを促うがして不借ふぢやく  
 身命みんぎの深信しんじんを立たしむ已すでに因果いんぐわ三道さんだう(惑業わくごふ苦くの事ことあり)等らうを會あ  
 得とし以もつて權實ごんじつ本迹ほんじやくの起おこ盡じんを解げ了りやうせし遮惡ぢやくあく持善ぢぜん安心あんしん立命りつめい摠とつ  
 掌てを反かすがことし蓋けだし宗教しゆけうの活用くわつごふ之これを過すざるなり一々の  
 名義なごぎは逐條しだいに解釋ごうしすへし

第一因果

問曰とつ佛敎ぶつてうの信心しんじんはいかいて發たるものなるや 答曰こたへて凡たゞる  
 佛敎ぶつてうの信心しんじんを起おこすには因果いんぐわの道理だうりを知しりてこそ佛敎ぶつてうを願ねが  
 ふ志こころざしも起おこるべけれ先因果まづいんぐわといふは因いんのもの、原げん因いん起おこる  
 所ところにして初はつめの事ことあり果くわはもの、結けつ果くわ果くわして成なる所ところにして終しゆう  
 のことなり譬たとへば草木くさくも種たねなくしては生なぜず種たねの因いんの如ごと  
 く草木くさくは果くわの如ごとし千草せんそう萬木まんぼく種たね色いろくあれり又またさまくの  
 もの生なひ茂さかるぞかし我等われら衆生しゆじやうの心こころは田地でんぢの如ごとく善惡ぜんあくの業ごふ  
 は種たねのことし今生こんじやうに王位わういとあり臣下しんかとあり士農工商しにうこうしやう貴賤きけん  
 上下じやうげ様々さまざまに生なを受うることは前世ぜんせいの業ごふ、因いんの種たね々さまざまに分わかりてあ

りし故とあるを思召せ又因是善惡果は無記といふ事あり是  
は前世に善業を行へば善者と生れ過去に悪業を作れば現  
在に悪きものと生れ過去に物の命をとり人を殺し傷つけ  
苦しめ魚蟲禽獸の類を屠り害なふ(此に一人の獵師あり鐵  
炮を以て鹿を打つと鹿は其炮丸を受けて遍身大苦痛を感じ  
遂に斃死す然るに一切衆生は元來平等々々ある者あるが  
故に此鹿と人といとも言ふべからず異とも言ふべからず  
互ひに相感ずる所ありて縁起相續する者なれば鹿は其の  
已れを打たる人の誰たるを知らざれども怨恨の心は獵師  
の心中に止まれり然れども其獵師の死するとき遍ねく五

體を搜索するも遂に鹿を打たる悪業は塵ばりりも不可得  
あり蓋し此身は唯是れ膿血等のみにして焼けば灰となり  
埋むれば土に化すと雖も其所作の悪業は因果微塵も相違  
せず故又若し此惡人曾て三皈五戒等の善根ありて一たび  
人間に生を受ることあるも必ず短命にして或は胎内又死  
し或は出生するも忽ち落命するあり者(其罪の輕重に隨  
ひ地獄餓鬼畜生の三惡道)又此人間の中にも至て愚痴ある  
者あり父母師長に恭敬禮事する事をも知らず世間の是非  
善惡をも辨まへず男女大小の禮儀をも知らざる者あり此  
心直に是れ畜生なり此心あれば必らず之に相應せし形あり

り之を畜生界と云ふ又一類あり朝より暮に至るまで只管  
 自己の資具は之を惜み貯へ他人の財物は之を得んことを  
 貪ぼり一針一艸をも人に恵むことなし此心直に是れ餓鬼  
 なり心の在る處は形これに従ふ乃ち餓鬼界の生を感ずる  
 あり又權力ある者は常に己れの威勢を恃みて妄りに殺害  
 を行ふことあり其他一切凡夫の有様として僅に心に適せ  
 ざることあれば父母三寶等にも瞋恚心を起して罵詈毀謗  
 する者あり甚きは之を毆打し之を殺害す此心直に地獄な  
 り此心あれば其形これに従ふ銅炎猛火を出現し來る地獄  
 界これあり)にしづみ量なき苦を受けその上も罪の餘り

人間に生れいつるとき五體不具とあり諸の病を受弓箭刀  
 杖等の難に逢ひ非業短命の報を受るあり又は慈悲仁恵深  
 して抑も生を人間に受る者は皈依佛。皈依法。皈依僧。の三皈  
 不殺生。不偷盜。不邪淫。不妄語。不飲酒。の五戒を因となすもの  
 なり)人を憐み病に藥を與へ他の横難を救ひ鳥獸等の命を  
 助けたる者は壯健無病長命の果報を得盜をしたる餘殃は  
 貧しく民を憐れみ貧者には財寶を施し三寶(佛寶とは法を  
 知覺するの人ある故に法寶とは迷を解き悟を得せしむる  
 の規則なり僧寶とい僧の法寶を維持し傳道するものにし  
 て營務を作す若之に衣食を供せされは佛教を廢滅あらし

むるに至らん衣食住を供養する等の餘慶は人と成ても  
福者となり金銀財寶心に從ふぞかし或は父母を敬ひ主君  
に忠節を盡し師匠を尊み假にも男女長幼の禮に違す佛像  
經卷を敬禮する等の餘慶は天上の果報を盡し人間に生れ  
ては國王諸侯の位を得常に人の上に立多くの人に敬ひ侍  
る、あり是に違ひて人を賤め無禮をふるまひし者は三途  
に沈み苦を受るのみならず人間に生れ猶下賤の報を得  
ありこれその因に善惡の業を造るによりて苦樂尊卑の果  
報を受るなれば因是善惡といふ云ふあり果は無記といふ  
其善惡の業因によりて貴賤貧福の果報を受けて只前世善惡

の業を果すまでにして此苦樂の果よりて未來の生をば  
牽ざるあり故に更善惡の界にはあらず其善惡の界にあ  
らざるを無記とは云ふなり(五穀等を以て之を言は、去年  
の粉種は因として今年の米は果なり去年の粉種の中に今  
年の苗もあく今年の穂の中に去年の粉種もあらざれど今年  
の春初めて種を下せしとき既に秋の實のりは決定する者  
あり唯此因果のみにして別に米の實跡と云ふ者あり又柿  
の木にて言は、花の開くときは因にして葉の熟するを果  
と名く此木の中に其花は不可得あり其花の中に葉はあら  
ず然れども此木あれば此花あり此花あれば此葉あり漸々

熟するに至りて唯此因果のみ別に柿菓の實跡あきか如し  
 然れども身には心のあるものなれば又其心より諸の善惡  
 の業因を作り未來に苦樂の果報を受ること過去の因によ  
 りて現在の果を受るか如し是則煩腦業苦の三道のなす所  
 にして環の端なきか如し因果は轉る小車のはてしもなく  
 六道生死の街衢に輪廻する事なり  
 第二惑業苦問曰煩腦業苦の三道とは如何なるものぞや  
 答前段に述たる因果を委しく言はし先煩腦とは見思塵沙  
 無明の三惑とて事廣くして容易演がたしといへども畢竟  
 は我等衆生の迷惑の心をさして煩腦といふ此惑に借し貪

しとあもひいとしかわいと思ふ心を貪欲といひ怒はらだ  
 つの心を瞋恚といひ諸の道理に闇きを愚痴といふ中にも  
 諸苦所因貪欲爲本とて此貪欲か本とありて諸の苦を受る  
 なり尤も慎み恐るへき事あり例へば畜類の中にも彼の狐  
 は狡猾ある者かれ共己が好める鼠の油煎の爲には畏ど知  
 りつゝ身命を捨る事あるか如く吾人も亦斯の如く或は色  
 欲の爲には寒暑を顧みず風雨あらしき夕も怖しき人目を忍  
 び心にまかせぬ衣服を粧りて男女の方に通ひ果は命をも  
 失ふに至る其樂しきは幾許かあらん唯縦に愛情に溺て數  
 の苦みを受るのみ又は財寶の爲に晨には星を戴きて出で



夕には月を踐んで歸り四方を馳走し艱難して限なし或は  
 士農工商夫々に己か家の榮ん事を願ひ色々に身を苦し  
 め様々に心を痛て得がたきの財を求む適求め得て家を  
 興と雖も是を守に己獨に叶ひがたければ人を雇ひ奴婢を  
 畜て是を作しむ然ども其營の疎にして己が意に違ひがち  
 ありさまて苦みて積集し財物も或は盜賊に奪れ若は水火  
 の災に罹り若は惡子眷屬に滅さる又は自の病難により心  
 の外に費出來て財寶を失ふ然は則ち元の求め得ざる時よ  
 りも貧苦に責るゝ事あるべし是等は貪欲の盛なるより求  
 るに難く守るゝ煩はしく失ふゝ苦しきにあらずや不如早

く非道の欲を省き足ことを知るべきあり是等非道の貪欲  
 より憤怒の瞋恚も發り道理も味き愚痴も起りて種々の惡  
 業を作り未來の苦を受るれば諸苦所因貪欲爲本とい説  
 給へり若瞋恚の心より弓箭刀杖等の物を貪り道理を忘る  
 事もあり又は因果の道理(西哲の語に曰宇宙事物の實理  
 を詳察するに最も緊要のもの)とす又曰宇宙事物の發象必  
 す原因あり結果あるは萬古一定の理にして學者の意を之  
 に注ぐを要す矣何んぞ事物の理のみあらんや吾人の靈魂  
 も此理の外に出るを得ざるものなり(に味き愚痴の意より  
 欲心も盛んに瞋恚も強なるべし此貪・瞋・痴は迷の衆生は脱る

事あたはずされば是を迷惑心とも三毒ともいふなり又  
 此三毒の身を煩し心を惱すによりて煩惱ともいふなり次  
 に業とい造作の義として上の貪。瞋。痴の三毒より出て諸の善  
 悪の業を造作するを業といふなり(十善十悪の業は次第に  
 明す)心に財寶を貪るか爲に非道を行ひ生類を殺し物を盜  
 み若は色を貪り聲に着し香にめて味に溺るゝより無量の  
 罪過を犯し又は瞋の心より人をちやめ物をろこなひ又は  
 愚痴の心より三世(過去未來現在)を云ふを信せず因果の理  
 を謗り妄言をいひ不義を行ひ人の妻を犯し酒を過し人を  
 侮り法に背くあり惣ては身。口。意。に經て行ふ所の善悪の業

を業といふなり次に苦とは上の煩惱と業とを因とし種と  
 して未來にも今日の如く苦樂の報を受けるをは惣て第三の  
 苦道と云ふ然るに此業因および苦報を受けるに順現業。順  
 次生業。順後業。として三の次第あり第一に順現業とは此世に  
 直に報をいふ例へば人を殺せば人に殺され盜をしては捕  
 はれ都て天下の法度に背き悪事顯ぬれば罪科に行れ又忠  
 孝を盡せば褒美を蒙り勤怠らざれば家を興す等は皆順現  
 の報ふ處にして是を現報ともいふ次又順次生業とは現在  
 の業因によりて次の生に苦樂の果報を受けるをいふなり例  
 へば一生善を作ども福も來らず彌艱難に(伯夷叔齊の首陽

に餓死うへじするの類い又生涯じやうが悪あくを作れども難かたも来きらず却かへりて益ますく榮さかるものは盗とう跖せきか奢おごりを極まめて壽じゆを終まるか如ごとき類いん因果いんがの道理だうりに違たがひに似にたれども悪あくを造つくるに惡道あくだう地獄ぢやく等とうといふに生うまて苦惱くたうを受け善ぜんを作なす人間にんげん天上界てんじやうがいに生うまれて福樂ふくらくを受うける事こと曾かつて疑うたがひなきものあり現世げんせの苦樂くらくは皆前世みなぜんせの因いんによれり若もし未來みらいの果報くわくほうを知らんと思おもはひ今日こんにちの業因ごういんを見みべし鏡かがみの如ごとく明あきらかにして隠かくれし三さんに順後業じゆんごごうといふは現世げんせ善惡ぜんあくの業因ごういんによりて三生さんせい已い後ごに至いたりて貧福ひんぷく尊卑そんひの果報くわくほうを受うけるを順後業じゆんごごうといふなり凡おほそ善惡ぜんあく俱くに因いんは少すくしきなれども其報そのむくみを得うるは夥おびたしきものなれば相構あひかまて善ぜんを少すくしありとして作なさることあ

かれ細毛こまげ必ず浮うぶ少すくしき惡あくも作なすことあかれ針はりは小ちひといへども必ず沈しづむが如ごとし 問と曰いは煩惱ぼんごうと業ごうとの因いんによりて果報くわくほうを受うけるを惣もて第三だいさんの苦道くだうといふは如何いかなる事ことにや素もとより樂たのしみは苦くにて有間敷あるまじきものを 答こた曰いは此苦このくに於おて苦く々々壞苦えく行苦ぎやうくとて三さんの謂いはれありて苦樂くらくどもに惣もて苦くと名なくるあり先苦まづく々々といふは寒熱かんねつ飢渴かつかつ貧賤ひんせん等の己おのれを惱なやすものは違境いぎやうとて己おのが心こころに受うけるとき苦くしと思おもふを苦受くじゆといふ其受そのうける所ところ苦く佛敎ぶつぎやう原人界げんじんがいを説とて苦果くくわの依身いしんといふこの依身いしんに受うける苦くある故ゆに苦くの上うへの苦くといふふければ是これを苦く々々といふなり次に壞苦えくとは色聲香味等しきしやうかうみとうの己おのが情じやうに叶かひたるものを順境じゆんぎやうとし素もとよ

り情で已に樂しと思ふを樂受といふ然れども花も散糸竹の音もやみ香も却て鼻に着味も口に飽腹に満ぬれば苦とあるゆへ都て順境の失ひ易く樂受の壞やすしかく失ひ壞れて樂みにも飽ぬれば終ゝ苦しきを壞苦といふあり三に行苦とは己に好むせず嫌むせぬものを中容の境といふ是を心に受るとき樂ども苦ども思ざるを捨受といひ此中容の境捨受の心は苦も樂も無やうなれども昨日は今日と變り今は後と移りゆき隨てそれこれと移行は勞しく苦しきものにこれあるを行苦といふなりされは違順中容の三境苦樂捨の三受は皆是苦々壞苦行苦に移されてあれば都

て苦道とはいふありされば我等衆生の樂と思ひぬるは皆凡夫迷心の僻思にして實は一切みあ苦あらぬはあし早くこの煩惱業苦の三道を捨て無苦無樂の大樂を願ふべし若さあふして煩惱によりて業を造り業因によりて苦果を受亦も此苦樂によりて貪瞋痴の煩惱を起し惡業を作りあば三界(一)には欲界五道及び六天の住所あり色聲香味觸の五欲盛んなる故に欲界と名く二には色界四天の住所なりいまだ色籠を脱せず故に色界と名く三には無色界已前二界の鹿色を脱す故に無色界と名くこれを三界六道といふ此事は委しく第二に明すの生死盡る事なく未來永々六道

に流轉せん事こそ世に怖しかるべけれ

明治十九年十一月三十日御届  
同 十二月 出版

(定價金二錢)

編輯兼出版人 新潟縣平民

高野日極

東京牛込區原町  
三丁目三十一番地

發行所 東京本郷本妙寺中  
教勵會

東京本郷區菊阪町  
八十二番地

印刷所 秀英舍

東京西紺屋町

明治二十年一月十七日

故日修聖人著

法の道志るべ 第貳

教勵會本部

第三六道の生死

問曰六道の生死とは何なる形にて又その六道とは何の處  
あるや 答是亦上の煩惱業苦の三道の中の第三苦果の依  
身に就て地獄餓鬼畜生修羅人間天上の六道に於て此に死  
し彼に生じ又彼に死し此に生じ生死息まざる故に六道の  
生死といふ若し惡因は三惡道に生れ若し善因は三善道に  
生る今具に之を辨ぜば

第一に地獄道(道とは因に從ふ言之若し果に約せば界とい  
ふべし)是は地の下にある獄にて大罪を作るもの、死て此  
の生を受く其苦患は無數にして又多の處ありといへども

粗一端を示さば(佛敎にては只人間界のみを論ぜず廣く十  
 界を論ず况んや六道をや又只現世のみに止めず遠く三世  
 を設けて吾心體心象の過去より來るの原因を推考し又現  
 世より未來に到るの結果を観察す是れ心理學を爲す要的  
 あり若し徒に現世五十の短齡にて滅無するものにして進  
 べ未來も無く退て過去も無ものあれば因果繼續の論理未  
 だ美を盡さず堯舜の子に丹朱商均の如き不徳者あり清盛  
 の子に重盛の如き英達人あるに至ては要一世の偶然にも  
 あらず又父母の遺傳種にも繋るべからず故に三世兩重に  
 因果を立て、結果の原因を知り又原因の結果となるべき

様を知て深く之を考察し三省九思遮惡持善以て吾心性の  
 歸着を了すへきなり故に佛敎を信するもの須く三世の存  
 在することを知べし既に心體は三世不來不去にして萬古  
 一定理あれども其の心象に至ては三世に往來して千變萬  
 化(今日く第八識を以て心體と爲し五十一の心所を以て心  
 象と爲す故に西洋の情緒に當るものにして所謂恐怖情主  
 我情憤恚情追求情審美情道義情等是れあり)ありと信ずべ  
 し只理論のみあらず現も吾人日夜に此の千變萬化の有様  
 を看過經歷たれば是の理殆實驗上より證明し得るあり既  
 ん種々の原因あり果して様々の結果あることを了すへし



茲の心象の千變萬化果して未來の生處を殊にせざるべからず之を攪て十界とす所謂觀心本尊抄に嗔地獄貪餓鬼癡畜生。諂曲修羅。喜天。平人。乃至世間無常在眼前豈人界無二乘界乎無願惡人。猶慈愛妻子菩薩界一分也乃至如堯舜等聖人者於万民無偏頗人界具足佛界一分也と仰せらるゝは則原因より結果を觀察するの因果繼續法より斯く御書判遊されたりさて右十界の中前六段は則六道ある故に吾人の善惡の岐派分れて千絲萬縷を成すに至ては又善惡の報果定めて千差萬別あるべしさて其の六道の中地獄は何ある處と穿鑿すれば則地下にありといふが佛教の常談あり是則

人界を中に置き上方を善報とし下方を惡報とす故下に地獄ありと立るものあり輓近地球の説舶來せしより甲曰地獄極樂も地球の隨處頭頂の説に壓せられて殆依據を失ふと乙曰天動丙曰地動丁曰地獄天堂は小乘說戊曰人界中に苦樂あるものは是ありと今日地球説舶來すとも吾佛教の地獄極樂を説くに何の障導かあらん却て西洋學士の識見を以て觀ずれば恐らくは長所あらん然りといへども凡そ幽界の事を沙汰し幽靈の事を左右するもの争てか顯界の事を議すると同轍ならんや故に可知的より不可知的を推定し實驗の能はざる所は理論より紐立て之をしらしむる

まてにて未だ地獄え到る風船も亦く未だ極樂え達する電  
 信も亦し將た望遠鏡も届かざるべし故に理論を以て推定  
 するのみ凡る吾人の視聽に達せずとも一概に無と計すべ  
 からず大經に四種の無を説く第一に未だあらざるを無と  
 いふ泥土に未だ瓶の形なきが如し若し他の縁に値へば顯  
 る泥の單元體には無されども他の火や藥と合元體ある時  
 瓶とあるがごとし吾人五陰合元に因りて現界に出生する  
 も此の義あり又地獄の五陰も準思すべし第二に破し已る  
 を無とす瓶の破れ挫ける時を無とす已に瓶の結合力の漸  
 次に衰弱して遂に破損し原の泥土に歸するをいふ然るに

此の無は原の單元體より歸するまでにして其の體必滅無に  
 わらず例せば一盆の水の熱光に値ふ時吸取らるゝといへ  
 ども又他日の雨雪とあつて下るがごとし高祖の御書判に  
 人の夜書するに火は滅るども字は存するが若し三界の果  
 報も亦復かくのごとしと仰せらゝる是あり第三に異相を  
 互に無とす例せば牛馬の互になきと思ふが如し彼下等の  
 蠢々たる動物に至ては互に己が境界より他に異なる物亦  
 しと惟ふべし是則情感のみにて更に知識の分別なき故な  
 ればあり是の理より推すときは人界のみにて他の世界則  
 地獄等の異相を互になきといふもの亦た知識に乏しき迷

の凡夫と云より外なきあり吾が佛は如に非ず異に非ずと  
 明に見そきはして謬りなき故に知者とも覺者ともいふ  
 り第四に畢竟して無きを無といふ則龜甲に毛なく兔の頭  
 に角なきが如く全くなきもの故に之を畏竟無といふ此の  
 四種の無に因て其の他の者又推考して未有の無と滅已の  
 無と隔異の無と畢竟無とを見別し來て時に吾が心體は那  
 邊に存在するやと十分に之を探究し決して斷見常見等の  
 異端邪説を妄信すべからず一步を進めて西洋學者の所謂  
 地球説に於て其の方處を定むる時は饒ひ地下に獄球あり  
 といふも茲の一地球中に立るにあらざ若し一地球に於

て立てば米國ても指すべきか否今西洋學士一般に此の地  
 球即一の惑星(又云遊星)の外に幾億萬の地球も又此の大陽  
 の外に亦幾億萬の大陽も存在すると云ことこの學者の信任  
 するところあり又月球の如き望遠鏡を以て觀るに山あ  
 り烟をいだす故に此の地球の動植物に殊あるも他の生活  
 物のある事は信任して可あり其は兎も角既に幾許の地球  
 が此の惑星の上下左右にありといへり其幾許の地球こそ  
 或は快樂の世界や或は痛苦の世界にてあるべし吾が佛の  
 天堂地獄と説たまふ實に所以あり天に二十八天及無量  
 諸天獄に百三十六及無數の獄の存在することは龜毛兔角

の如きに、あらず若し異相を無と妄想するに非んば他の  
未<sup>いまだ</sup>有<sup>あ</sup>の無<sup>む</sup>と滅<sup>めつ</sup>已<sup>い</sup>の無<sup>む</sup>等に執<sup>しゆ</sup>計<sup>けい</sup>する故<sup>ゆゑ</sup>あるべし既に此<sup>こ</sup>等<sup>とう</sup>の  
天<sup>てん</sup>界<sup>がい</sup>地<sup>ち</sup>獄<sup>ごく</sup>等<sup>とう</sup>は幾<sup>か</sup>千<sup>せん</sup>万<sup>まん</sup>里<sup>り</sup>の遠<sup>えん</sup>方<sup>ぽう</sup>あれども吾<sup>われ</sup>人<sup>ら</sup>の繫<sup>せき</sup>縛<sup>ばく</sup>あき心<sup>こころ</sup>  
は一念<sup>ひとまごころ</sup>遍<sup>ひん</sup>法<sup>ぽう</sup>界<sup>がい</sup>あれば生<sup>しやう</sup>死<sup>じ</sup>の四<sup>つ</sup>辻<sup>つじ</sup>より何<sup>いづれ</sup>えも瞬<sup>たち</sup>間<sup>ま</sup>に到<sup>たう</sup>達<sup>たつ</sup>  
るものにて面白<sup>おもしろ</sup>きものあり尙<sup>なほ</sup>是<sup>こ</sup>の世<sup>よ</sup>界<sup>かい</sup>を造<sup>ぞう</sup>立<sup>りつ</sup>するは皆<sup>みな</sup>吾<sup>われ</sup>  
人<sup>ひと</sup>の心<sup>こころ</sup>あれば茲<sup>こゝ</sup>の心<sup>こころ</sup>を定<sup>さだ</sup>むべきことこそ肝<sup>かん</sup>要<sup>よう</sup>あり凡<sup>およ</sup>そ地<sup>ち</sup>  
の下<sup>した</sup>數<sup>かず</sup>由<sup>よし</sup>旬<sup>じゆん</sup>の空<sup>くう</sup>間<sup>かん</sup>を經<sup>へ</sup>て一<sup>ひとつ</sup>地<sup>ち</sup>球<sup>きう</sup>名<sup>な</sup>けて無<sup>む</sup>間<sup>かん</sup>地<sup>ち</sup>獄<sup>ごく</sup>といふ堅<sup>た</sup>  
横<sup>よこ</sup>高<sup>こう</sup>廣<sup>くわう</sup>にして能<sup>しゆ</sup>依<sup>い</sup>の身<sup>み</sup>亦<sup>また</sup>大<sup>だい</sup>身<sup>しん</sup>なり視<sup>め</sup>官<sup>くわん</sup>に、常<sup>つね</sup>に惡<sup>あしき</sup>色<sup>しき</sup>苦<sup>く</sup>患<sup>わん</sup>  
のものを見<sup>み</sup>聽<sup>み</sup>官<sup>くわん</sup>には惡<sup>あしき</sup>聲<sup>こゑ</sup>阿<sup>あ</sup>嘖<sup>いん</sup>の聲<sup>こゑ</sup>を聞<sup>き</sup>き嗅<sup>か</sup>官<sup>くわん</sup>には惡<sup>あしき</sup>香<sup>かほ</sup>嗅<sup>か</sup>  
穢<sup>けがれ</sup>の氣<sup>き</sup>にむせび味<sup>あじ</sup>官<sup>くわん</sup>には極<sup>ごく</sup>熱<sup>ねつ</sup>の鏡<sup>きやう</sup>丸<sup>わん</sup>を食<sup>しよく</sup>し猛<sup>もう</sup>火<sup>くわ</sup>毒<sup>どく</sup>烟<sup>えん</sup>出<sup>い</sup>入<sup>に</sup>  
て息<sup>いき</sup>あぐ觸<sup>ふ</sup>官<sup>くわん</sup>には諸<sup>しよ</sup>の苦<sup>く</sup>痛<sup>いた</sup>を受<sup>う</sup>る事<sup>こと</sup>多<sup>おほ</sup>くして譬<sup>たと</sup>るに物<sup>もの</sup>あ  
し四<sup>し</sup>方<sup>ぽう</sup>上<sup>じやう</sup>下<sup>げ</sup>熱<sup>ねつ</sup>鉄<sup>てつ</sup>猛<sup>もう</sup>火<sup>くわ</sup>あらざる所<sup>ところ</sup>もあぐ前<sup>ぜん</sup>後<sup>ご</sup>左<sup>さ</sup>右<sup>う</sup>劔<sup>けん</sup>林<sup>りん</sup>刀<sup>とう</sup>樹<sup>じゆ</sup>  
ならざる所<sup>ところ</sup>もなし足<sup>あし</sup>をあぐれば身<sup>み</sup>肉<sup>にく</sup>悉<sup>しつ</sup>燒<sup>や</sup>盡<sup>じん</sup>足<sup>あし</sup>をくだせば  
身<sup>み</sup>却<sup>かへり</sup>て本<sup>もと</sup>の如<sup>ごと</sup>し其<sup>その</sup>の一日<sup>いちにち</sup>一夜<sup>いちや</sup>は人<sup>にん</sup>間<sup>げん</sup>の無<sup>む</sup>數<sup>すう</sup>百<sup>ひゃく</sup>千<sup>せん</sup>の歲<sup>さい</sup>月<sup>げつ</sup>に  
も超<sup>こ</sup>其<sup>その</sup>の晝<sup>ちゆう</sup>夜<sup>や</sup>に無<sup>む</sup>量<sup>りやう</sup>の生<sup>しやう</sup>死<sup>じ</sup>の苦<sup>く</sup>患<sup>わん</sup>を受<sup>う</sup>また無<sup>む</sup>量<sup>りやう</sup>千<sup>せん</sup>万<sup>まん</sup>億<sup>いふ</sup>の  
年<sup>とし</sup>月<sup>つき</sup>を經<sup>おほ</sup>ども更<sup>さら</sup>も浮<sup>う</sup>出<sup>で</sup>世<sup>よ</sup>あし苦<sup>く</sup>甚<sup>しん</sup>と雖<sup>いへ</sup>歎<sup>なげ</sup>付<sup>まつ</sup>んとする思<sup>おも</sup>ひ  
にあし増<sup>まし</sup>て一<sup>いち</sup>念<sup>ねん</sup>刹<sup>しやく</sup>那<sup>な</sup>も苦<sup>く</sup>の間<sup>ま</sup>あぐ芥<sup>けい</sup>子<sup>し</sup>微<sup>み</sup>塵<sup>じん</sup>も痛<sup>いた</sup>まざる所<sup>ところ</sup>  
あければ無<sup>む</sup>間<sup>かん</sup>地<sup>ち</sup>獄<sup>ごく</sup>とは號<sup>ごう</sup>すぞかし是<sup>これ</sup>等<sup>とう</sup>の地<sup>ち</sup>獄<sup>ごく</sup>に落<sup>お</sup>る原<sup>た</sup>因<sup>ねん</sup>  
は曾<sup>かつ</sup>て人<sup>にん</sup>間<sup>げん</sup>たりし時<sup>とき</sup>無<sup>む</sup>益<sup>えき</sup>の漁<sup>しやう</sup>獵<sup>りやく</sup>をなして物<sup>もの</sup>の命<sup>いのち</sup>をとり人<sup>ひと</sup>  
を殺<sup>ころ</sup>し傷<sup>や</sup>ひ(殺<sup>ころ</sup>生<sup>せい</sup>罪<sup>ざい</sup>)或<sup>ある</sup>は權<sup>けん</sup>威<sup>い</sup>に任<sup>ま</sup>せて貧<sup>ひん</sup>賤<sup>せん</sup>者<sup>もの</sup>の財<sup>たから</sup>物<sup>もの</sup>を奪<sup>うば</sup>

て息<sup>いき</sup>あぐ觸<sup>ふ</sup>官<sup>くわん</sup>には諸<sup>しよ</sup>の苦<sup>く</sup>痛<sup>いた</sup>を受<sup>う</sup>る事<sup>こと</sup>多<sup>おほ</sup>くして譬<sup>たと</sup>るに物<sup>もの</sup>あ  
し四<sup>し</sup>方<sup>ぽう</sup>上<sup>じやう</sup>下<sup>げ</sup>熱<sup>ねつ</sup>鉄<sup>てつ</sup>猛<sup>もう</sup>火<sup>くわ</sup>あらざる所<sup>ところ</sup>もあぐ前<sup>ぜん</sup>後<sup>ご</sup>左<sup>さ</sup>右<sup>う</sup>劔<sup>けん</sup>林<sup>りん</sup>刀<sup>とう</sup>樹<sup>じゆ</sup>  
ならざる所<sup>ところ</sup>もなし足<sup>あし</sup>をあぐれば身<sup>み</sup>肉<sup>にく</sup>悉<sup>しつ</sup>燒<sup>や</sup>盡<sup>じん</sup>足<sup>あし</sup>をくだせば  
身<sup>み</sup>却<sup>かへり</sup>て本<sup>もと</sup>の如<sup>ごと</sup>し其<sup>その</sup>の一日<sup>いちにち</sup>一夜<sup>いちや</sup>は人<sup>にん</sup>間<sup>げん</sup>の無<sup>む</sup>數<sup>すう</sup>百<sup>ひゃく</sup>千<sup>せん</sup>の歲<sup>さい</sup>月<sup>げつ</sup>に  
も超<sup>こ</sup>其<sup>その</sup>の晝<sup>ちゆう</sup>夜<sup>や</sup>に無<sup>む</sup>量<sup>りやう</sup>の生<sup>しやう</sup>死<sup>じ</sup>の苦<sup>く</sup>患<sup>わん</sup>を受<sup>う</sup>また無<sup>む</sup>量<sup>りやう</sup>千<sup>せん</sup>万<sup>まん</sup>億<sup>いふ</sup>の  
年<sup>とし</sup>月<sup>つき</sup>を經<sup>おほ</sup>ども更<sup>さら</sup>も浮<sup>う</sup>出<sup>で</sup>世<sup>よ</sup>あし苦<sup>く</sup>甚<sup>しん</sup>と雖<sup>いへ</sup>歎<sup>なげ</sup>付<sup>まつ</sup>んとする思<sup>おも</sup>ひ  
にあし増<sup>まし</sup>て一<sup>いち</sup>念<sup>ねん</sup>刹<sup>しやく</sup>那<sup>な</sup>も苦<sup>く</sup>の間<sup>ま</sup>あぐ芥<sup>けい</sup>子<sup>し</sup>微<sup>み</sup>塵<sup>じん</sup>も痛<sup>いた</sup>まざる所<sup>ところ</sup>  
あければ無<sup>む</sup>間<sup>かん</sup>地<sup>ち</sup>獄<sup>ごく</sup>とは號<sup>ごう</sup>すぞかし是<sup>これ</sup>等<sup>とう</sup>の地<sup>ち</sup>獄<sup>ごく</sup>に落<sup>お</sup>る原<sup>た</sup>因<sup>ねん</sup>  
は曾<sup>かつ</sup>て人<sup>にん</sup>間<sup>げん</sup>たりし時<sup>とき</sup>無<sup>む</sup>益<sup>えき</sup>の漁<sup>しやう</sup>獵<sup>りやく</sup>をなして物<sup>もの</sup>の命<sup>いのち</sup>をとり人<sup>ひと</sup>  
を殺<sup>ころ</sup>し傷<sup>や</sup>ひ(殺<sup>ころ</sup>生<sup>せい</sup>罪<sup>ざい</sup>)或<sup>ある</sup>は權<sup>けん</sup>威<sup>い</sup>に任<sup>ま</sup>せて貧<sup>ひん</sup>賤<sup>せん</sup>者<sup>もの</sup>の財<sup>たから</sup>物<sup>もの</sup>を奪<sup>うば</sup>

ひ横に債を償はず總て他の物を盗る(偷盜罪之)或は不義に  
 して他の妻妾を犯し(邪淫罪之)或は己が爲に偽り虚言し(妄  
 語罪之)或は惡口麤荒の語多く(惡口罪之)或は人の陸じき中  
 を破て争を起さしめ(兩舌罪之)或は猥に人を罵謗比丘等の  
 過罪を説證ることを好(綺語罪之)或は強欲にして酒に水を  
 加へて利欲をもとめ毒酒毒藥を造り商ひ總て非道の欲を  
 ちし(貪欲罪之)或は憤恚盛んにして人を毆打し又は非理の  
 諍論をちし(瞋恚罪之)或は邪見の意を起し三世因果の道理  
 を罔し父母師長の教に戻て不忠不孝の行跡をちし酒を過  
 して諸の惡業をちし(愚癡罪之)總て上品の十惡とて惡心熾

盛にして殺生偷盜邪淫妄語惡口兩舌綺語貪瞋癡の十種の  
 罪を造り殊に瞋恚の所行(高祖の瞋は地獄の業と仰せらる  
 是あり)多もの此等の地獄に生れて種々の苦患を受るな  
 り中にも逆罪とて父母師長主君を殺し尊き聖人をころし  
 佛。法。僧の財物を盗て償ず惡心を以て佛像經卷を破壊し伽  
 藍。寺。塔を破却したるもの、生處(是れ全く造化教の神意よ  
 り罰を與へ人を苦しめる杯の旨趣とは天涯あり又社會に  
 道徳を保存せん爲の恐赫主義にて僧侶の徒に地獄等を説  
 にあらず因果繼續の論理の確説あり若し語を代て辨ずれ  
 惡心能く地獄を造り出すあり故に佛教を因縁教といふ

あり)にて殊に勝れて怖しきは謗法の大罪あり謗法とは邪見の心甚しふて佛法僧の三寶を誹謗する事にて中にも此の法華經は諸經中王最爲第一とて何れの教經よりも勝れて萬民の中の大王の如く最第一の御經あるを華嚴經般若經大日經等よりも劣よしをいひ禪律眞言等よりも勝ぐれざりけりあど打思ひ法華經をば讀も持もせずたとへ讀持とも彼くの教經あどには劣るゝおもひををし或は法華經は勝ておはせども我等が貪瞋癡のきたなき心より持ば却て罪にさると自ら思ひ人にも勸て人の信心を退しめ或は藥師如來阿彌陀佛等をば拜もし名をも唱るとも法華經并

教主釋尊をば信じ奉らず信ずるとも彼くの教經と同じと謂ひ劣謂勝の邪見は脱れがたきあり況て法華經を毀謗し行者を輕賤憎疾せしものは上の逆罪を一に造る罪よりも超て無數劫とて數もしらぬ多の阿鼻の壽命を極て久しき間量りあき苦を受るよし法華經に説れたりたとひ貴顯高位の者と生れ智者學匠といはるゝとも上の十惡五逆(殺父殺母殺阿羅漢破和合僧出佛身血の五あり當時は佛阿羅漢は在さいれども妄に佛像經卷を破毀し貴き聖僧を殺害する等を以て相似の五逆罪とす其の意を以て上に出す)の罪を造り謗法を爲すぞならば未來の生は無間地獄に受く

べき道理あり。聞からく、那落の所に沈ては、刹利も須陀  
 もかはらざりけり。いとへの帝は、歎かせたまひしよし  
 相搦て、慎み恐るべきあり。第二に、餓鬼道(此道は諸趣に徧  
 在する)是に二の別あり。一には有威徳鬼(これに亦多威徳  
 と少威徳との二あり)是は甚だ威徳多して、果報も人間に勝  
 れ、宮殿を莊嚴し、飛行自在にして、姿も天人の如した。時に  
 飢渴の苦あり、或は國城村里の守護神とあり、經王善根の法  
 味を食し、若は山林廟社の神となり、祭祀の備に飢をしのぎ  
 (正邪を別たず、神佛を妄信するもの、茲の篇を讀み、了ちば宜  
 しく、猛省する)と、ころあるべし。又少威徳のものは、人の病に

乗じて、熱氣を食ひ、疫病等の神となり、其の臭氣不淨を吸ひ  
 (陀羅尼品に、若不順我咒、惱亂說法者、頭破作七分。如阿梨樹枝。  
 と、誓ひ給ふ、抑も頭が七つにわるゝといふことは、養命の精  
 氣七滴、鬼神に吸ひ取らるゝよし、宗祖の仰もあれば、今時斷  
 見の徒、茲の篇を少しく参考あるべし)又は人の善根を破り  
 惡業を作に、便を得て、寸善尺魔といふ世諺あり、是則尺魔を  
 るべし)其の人の精魂を奪ひ食ふことを得るゝ是等の原因  
 は、曾て人たりし時、善は行ひつれども、貪欲の心深が故に、人  
 に多も與へず、己が好ものを食ども、人には穢たる物を與へ  
 貪り惜む心より、さまゝの惡業をあすものゝ、因に報ふて

此の果を得るあり二には無威徳鬼是は糞穢不淨を住居とし常に飢渴に苦しみ頭に火焔を戴き熱惱堪がたく喉は糸筋の如して涕唾不淨の水だに通じ難く腹は廣大にして多く食といへども備りがたし况て年月を越て飲食の名をだに聞す適尿管の穢物を見るとき威徳有ものに奪はれ餘に飢渴の苦さに己が肉を食ひ血を啜り若は可愛の子を食ふ又は鐵沙などを食ひて苦み叫ぶといへども前世の因縁(前世あどいへば人疑ふべけれどる近く此の世に例せば彼の貪欲強盛の者他の物を非道に奪ひ劫かしあどせし原因は其の報として囚獄の寒窓下に呻吟じ懲役場裏に鹿食艱

難の果を得が如し)のあすどころなれば死すこと叶はず久しく苦痛に逢ふ是等は曾て人間たりし時中品の十惡を造り殊に貪欲の心深して強に貪り借み(高祖の貪は餓鬼の業と仰らるゝ是あり)人の餓苦を見ても憐惠の心あく人の飲食を妨他の供養をあすに障礙をなす况して自身に供佛施僧の善行のあるべきか一向に慳貪あるもの死して餓鬼道に墮つ又地獄畜生よして苦を受け猶餘罪あるもの餓鬼と生てその罪を果すものあり 第三に畜生道(此の道も諸趣に徧在す殊に人間界に多く雜り居す又傍生ともいふ凡そ此道の身を受る者は魚。虫。禽。獸。羽。(鳥類)毛。(獸類)鱗。(龍)魚。の



類(甲。龜類)無足。長虫の類(二足。鳥類)四足。獸類(多足。百足の類)裸蟲。蛇類。殼蟲。(貝類)總て卵。鳥。虫の類(胎。牛馬の類)濕。(水の垢より生ずるの類)化。(菜の虫化て蝶とある類)の四生及び水。(龍。魚等の水に住むもの)陸。(地に住む虫及林に遊ぶ獸の類)空行。(鳥并に空間を飛行する動物)の三種種々様々の類若干なりといへども大概横に歩行して人の如く立て行ものは稀あるゆゑ傍生といふあり(行ひ正しからざるゆゑ此の生を受く)横行の者横行の形を得るは蓋し色心不二の故あるべし)又多分は他の養によりて己れと作り食は稀あるゆゑ畜生ともいふ中にも龍王金翅鳥あどの宮殿樓閣に住七

珍萬寶を備て其身を莊嚴し壽命も長久に果報も人間に勝れり是等の曾て人たりし時五戒(不殺。不盜。不邪淫。不妄語。不飲酒。あり)十善(下)出すべし)の修行しつれども愚痴にして能守得ず多破戒の者は是等の畜生とあつて三熱の苦を受く又威徳なきもの常に重を負ひ鞭打を被り苦痛忍がたく但水草を思の外に更に知ことかく或は鼠は猫に抓れ猫は犬に噛れ犬も狼に食れ狼も虎を恐れ虎も獅子を恐れ都て大なるの小を害し強の弱を威し互に殘殺し又大なるも人を怖て安意もあく東西に食を求めて飽ことを知らず網に纏れ畏にかゝり餅を食て命を失ひ愚癡にして寒熱風雨を防

の營も知らず況して善根修行のあるべきかハ二六時中に  
 飢に苦み怖畏て自在あることあし或ハ朝に生じ夕に死し  
 て一日の命さへ全からず多の生死艱難を経て苦痛ひまあ  
 し是等の原因は曾て人たりし時下品の十惡を造り殊に愚  
 痴(高祖の愚痴の所業畜生ありと仰せらるハ是なり)にして  
 達理を辨へず邪見にして因果を信ぜず多戒善を破もの此  
 道に生て苦み又地獄餓鬼の苦み畢猶餘罪有もの畜生の苦  
 をうくるなり(以上之を三惡道といふ三善道は第三に出す  
 べし)

明治十九年十一月三十日御届  
 同 十二月 出版

(定價金二錢)

新潟縣平民

編輯兼出版人 高野 日 極

東京牛込區原町  
 三丁目三十一番地

東京本郷本妙寺中

發行所 教 勵 會

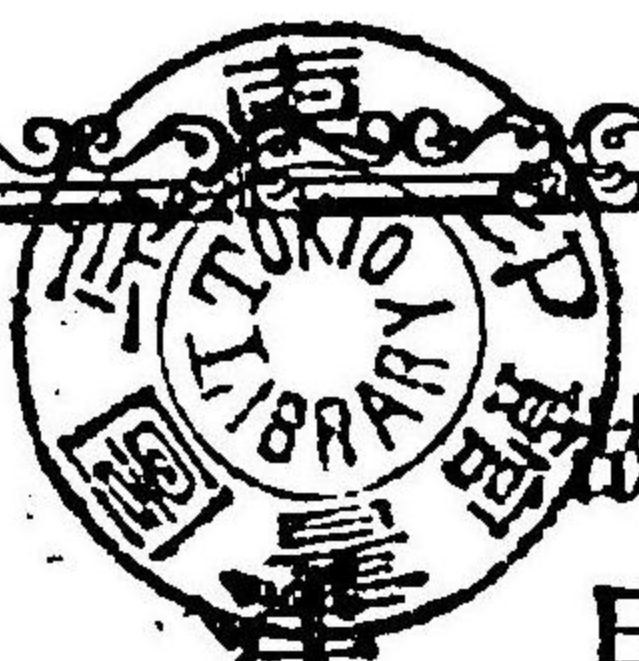
東京本郷區菊阪町  
 八十二番地

印刷所 秀 英 舍

東京西紺屋町

明治二十年二月十二日内務省交付

故日修聖人著



法の道志るべ 第三

教勵會本部

第四に阿修羅(梵語)之此には無酒無天無端正といふ各其の  
義あれども繁を厭て之を略す(道是の形人の如く果報の  
却て人間に勝れ福力を備へ壽命も長久に身形も長大なり  
或の大海の邊又の高山の麓に住し若の山深人の至ぬ處に  
住て官殿嚴飾し威徳自在なりされども常に我慢高貴の意  
深して戦を好み勝事を悦び刀杖弓箭の難止ことなし時あ  
つて天より刀杖を降す又熱惱のくるしみを受今こゝにも  
戦場の砌の修羅の巷といふ善根修行の志少し是の曾て  
人たりし善根のあしつれども我慢の心深く少の善根に  
も廣大の思ひをちし學問技藝の才にほこり己が權威高貴

に慢して人を侮り賤め人の善根才能を猜みて己獨り賢人  
あらんことを欲し(問曰富國強兵の社會の通義あるのみか  
らず尤愛國志士の熱望して止まざるところなり然るに此  
篇頌りに之を制するもの、如し却て偏邪の宗教とも謂つ  
べきや 答ふ凡そ茲章の詔曲邪心を以て上をへつらひ下  
をしひたけ己の權威を逞ふするを以て快とする者を折挫  
する心あり愛國の士豈に斯の如き行爲をせん宜しく勵む  
べきは自他俱安の道講すべきは富國強兵の策耻べきは自  
己高擧の心制すべきは亂臣賊子の行あり)人に勝事を好み  
優らんと樂ひ詔曲とて(宗祖の詔曲は修羅の業と仰せらる

ハ是あり)高又諂ひ偽て禮義を飾り又人の善事を疑猜都  
て下品の五戒十善を行ふもの多の阿修羅の属あり又餓  
鬼畜生の部類も似たり  
第五に人道此道の苦樂相雜り智慧才覺を備へて善根修行  
の器あり(方今世上に人の心を情感智力意志といふ茲心ろ  
即黒なり)先その樂の相をいは眼には青黄赤白種々の色  
を愛し花を眺月を望み樂をあし耳に絲竹歌謠の聲を愛  
し鼻に蘭麝沈水妙ある薰り及び男女の身香を愛し口に  
の甘甜酸鹹の味山海の美味を愛し及び音聲を出して樂み  
とし身に衣服の滑る及び暑き時の涼しく寒き時の暖

に殊に男女の細軟と柔かなる質に觸れ、悦び(以上)これを  
 五識といふ西洋心理學にも視覺(眼識)聽覺(耳識)顛覺(鼻識)  
 味覺(舌識)觸覺(身識)の五感といふものありて五識と同じ  
 きなり(意に欲の想を擅まじ善惡の法を思ひ詩を作り歌  
 をよみて心を慰さめ或ひに寒熱風雨を防ぐの家を作り  
 衣裳を貯へ金銀財物を積聚て情欲を暢飲食等に樂むすべ  
 て貴きあり賤きあり富あり貧あり老と若と若と若と若と男も  
 女も賢も愚も使ふ主君も使ふ、奴僕も各それ(べ)の分限  
 に應じ情謂に隨て樂をなすこと上の三惡(地獄、餓鬼、畜生)四  
 趣(三惡に修羅を加へて四趣とす又四惡趣ともいふ)に勝

て果報もいみじきなり(以上の意に屬するを以て智力に似  
 たれども皆情緒なりとしるべし)但し是等は皆凡夫迷の心  
 よりみれば樂ども何れも賢者聖人の眼より觀れば情は  
 善惡をえらまず、只快樂を得んことを欲す、故に智識より判  
 ずる時はこれを迷といふ人間の智力既に然り諸法の實體  
 を悟り究めたる佛の智力をや(皆苦、壞苦、行苦、三境、三受、三  
 苦の第一壹號にいだせり)に遷されて色聲香味觸の樂は皆限  
 あるものあり何ぞこれを常住といふことを得ん況や人間  
 一期の苦を考るに先母の胎内に處するに汚血不淨の中に  
 孕れて苦み少からず生る時の苦痛堪がたぐ初て世間の風

に吹るゝに身肉を刺るゝ如し(讀者想像の説と思ふかかれ  
 佛の心脉の何たるを究め生死に出入自在なる故實驗した  
 まふどころあり)幼ときの大便秘の不淨を避る事あたはず  
 既に長ずるに及んで人に使れ稽古に苦み人を恐れ世を憚  
 り或の寒暑に苦み風雨に侵れ色欲も漸く盛かれども意に  
 任せず假令求うるども實にの樂にあらず尿管涕唾骨肉筋  
 血の諸の不淨の身體に充滿し假に紅粉を粧ひ蘭奢を薫ら  
 すども只ひとへの薄皮を粉り嚴るのみ然も又親友にの逢  
 ひ難ふして別れ易し難而怨にの値易ふして離難し金銀財  
 寶の得難ふして失易し妻子眷屬も多といへども其心區に

して意に稱ふの稀に己に背の多し己が身だに猶意に應じ  
 難し斯て盛者必衰の理あれバ眼耳も月々に衰へ身力も日  
 々に弱り果て杖に助らるゝの外に行歩も覺束あし况や四  
 百四病に(吾人の依身は地水火風の四大の所成あれば亦此  
 四大より病を感起す故に地大に百一水大に百一火大に百  
 一風大に百一之を四百四病といふ)身を苦め其重に至りて  
 飲食も喉に通らず餓鬼の苦も餘所に有ども覺ずまして無  
 常の殺氣は尊も卑も老たるも若きも隔て漏すことなした  
 どへ國王とありて七珍万寶こゝろに任かせ宮殿樓閣美麗  
 に嚴り百官百史前後に列あり女御更衣左右に侍り出れば

道を清め入ば禪をもふみ綾羅錦繡を身に纏ひ琴瑟書畫に  
 戯れ珠盈玉腕を列ね山海の珍味を盡せども遷滅の嵐頻に  
 吹來り斷末磨隨命終の時四大分裂する苦ありの劍風身肉  
 を解き骨髓を破る其苦み譬んかたなし露命既に消ぬれば  
 さほど自在を究めし王位も附隨ふものとは心に造る惡  
 業の呵嘖の鬼と現の外あしこれ則ち因果應報自業自得の  
 正理なりかくの如きの四苦(生老病死)八苦(上の四苦に愛別  
 離苦怨憎會苦求不得苦五盛陰苦の四を加ふ)いふともあど  
 か盡ることあらん(西洋の或る學士は廣く主義を立る時宗  
 教を以て禁欲主義と辨せられたり然れども東洋の宗教中

吾宗の如きは苦樂の實際を正斷する故に公平主義といふ  
 べし其の公平主義に達するまでの修行も敢て禁欲主義に  
 わらず却て樂欲主義といふべきか故に茲篇前後に禁欲に  
 似たる語あれども他の偽宗邪教の説と玉石混交すべから  
 す(凡そ六道流轉の中適人界に生れ來て猶善根も種へず惡  
 業を擅にせば三惡道にや劣りなん五途の苦といへども  
 苦を受に隙あければ惡を造る事あしされば惡業を畢あば  
 人間にも生れあん(六道の依身は前世の業因に依るあれば  
 現在の苦に因て未來の生を牽事あし故に三惡道にして業  
 を果あば人間にも生るべし復順後業等の輪廻を思ひ合



すべし三業のことの第壹號十七紙に出)人として罪を造ば  
惡道は服べからず然に人間の修羅天道にも勝たることは  
智慧も賢く仁義禮智信の五の道をも守り因果の理を辨へ  
戒五善十を行ひ貧者を恵み病者を憐み愚なるを教へ迷を  
導き弱を扶け廢れたるを興し老を養ひ幼を育つ是等の善  
業の功力に因て未來に人中天上に生れて福樂を極むること  
と人間の果報の勝れたるに非や殊に勝れて貴き父母に  
孝行を爲し主君に忠義を盡し佛を敬ひ法を信じ衆僧を供  
養し(三寶の事は第壹の九紙に出)菩提の道に入其勤め怠ら  
ず往生成佛をもとげん事の全く餘の五道(地獄餓鬼畜生修

羅。天上界)に優るぞかし然るを獲りに六情(眼に色を愛し耳  
に聲を聞き鼻に香を嗅舌に味を嘗身に觸を覺え意に法を  
緣じて情に溺るゝあり)を恣にし男女の愛欲にほだされ  
貪瞋癡を倍増し十不善十惡あり)の業を造り不忠不孝にし  
て無禮不義の働きをあじ不信懈怠にして後世菩提の勤を  
あさず邪見非道にして三世因果の理を毀り佛象經卷も尊  
貴の思をあさず正法弘通の師に卑賤の念を生じ佛を謗り  
法を憚にせば現世には諸の災難に値後生には地獄畜生餓  
鬼に墮て數の苦を受億千萬劫にも浮み出難からん事こそ  
悲しけれ實に恐るべきは不善惡業の因緣勤むべきは後生

菩提の善根功德ぞかし(如何ある業因に依て人間に生れ來  
 やは天道のしもに明すべし) 第六に天道是はたい樂のみ  
 ありて苦の相なく宮殿樓閣は金銀珠玉を鏤め懷妊の惱も  
 なく在胎の穢もなし生るゝときは化生(凡そ生を受るに卵  
 胎。濕。化。の四種あり則天は化生あり四生のすがたは第二號  
 に出すとて忽然として父母の側に現出し寶衣は自然に身  
 に纏ひ七寶の瓔珞ありて其身を莊嚴し食せんとすれば天  
 の甘露(如此き事は斷見の徒は疑べけれども果報の勝劣に  
 因て人。畜。天。鬼。の別あるもの故さのみ不思議にもあらず所  
 謂一水四見といふとあり人間は水を水と見魚は水を住家

と見。天は水を甘露と見。魚は水を火と見る。よし)百味の飲  
 食自然に寶器に満て營造の勞なく身には光明ありて側を  
 照し日月燈燭の光を借らず晝夜の別も(日月即晝夜ある故  
 今日月無れば晝夜の別なく行んとすれば自然の寶車  
 有て虚空をも飛行し六通力といふ事あり謂く神境通。謂く  
 天眼通。謂く天耳通。謂く他心通。謂く宿命通。是は過去万億年  
 のとを知る通あり。謂く漏盡通。是は一功の煩惱を斷盡する  
 通あり然るに前の五通を得事は四靜慮といふ定力に因て  
 第三果の聖者の發得する通あり第六の漏盡通は第四果の  
 聖者の簡取する通あり是天は只前の四を分得する相を辨

ずるまでにて未だ位に約し界(欲界色界無色界)を定め定惠  
 を別たす時に虚空飛行するを神境通といふ眼の障の外を  
 見徹しこれを天眼通といふ凡そ眼に五あり謂く肉眼此の  
 地球の人及び動物の眼(亦借光無借光等の種類あり)これか  
 り謂く天眼是即天の眼なり。謂く慧眼。謂く法眼。謂く佛眼。是  
 等の只被障細遠を見るのみならず吾人の心本亦茲心の  
 千變萬化のありさま及び物の假眞理の權實性の染淨事の  
 本迹等を明に觀たまふ佛及上分の菩薩の眼目あり又聞ん  
 ど思へば遠く千里の餘所の音聲を聞(天耳通あり)或は他  
 心通あるは他の心をも辨ふ(他心通あり)常に自然の音樂有

て其心を慰め通力自在にして快樂量あきこと前を見れば  
 後を顧ず右を思へば左を忘る是其樂のあらましあり又然  
 も天の壽命長久にして快樂量りあしといへども爰には無  
 常の風の尙吹來るなり若命數盡て死に近時の五衰の相と  
 て身の光失。腋の下より汗を出し。天衣に垢つき身力も衰て  
 本座を樂はず。冠の莊の華萎む。此五の死相現する時のさほ  
 ど樂み思ふ天上の快樂を捨て死ての惡業の餘殃(惡の順後  
 業の類あり三業のこと)第一號に出によりて三惡道に生  
 るゝことを愁歎する其苦いかばかりぞや但佛道の因縁深  
 く信心の者のみこそ還墮三途(譬の屈步蟲の木の上に昇ん

として木の末になりて昇る處あき時の復木の本を歸るが  
ごとく天界の頂に到り復本の三惡道に還るをいふの苦を  
ハ脱るありと經説にも明らかありけらし十善のことは第  
四に出すべし

明治二十年一月十五日御届  
同 一月 出版

(定價金二錢)

新潟縣平民

編輯兼出版人 高野 日 極

東京牛込區原町  
三丁目三十一番地

東京本郷本妙寺中

發行所 教 勵 會

東京本郷區菊阪町  
八十二番地

印刷所 秀 英 舎

東京西紺屋町

明治二十年三月三十日内務省交付

故日修聖人著

法の道志るべ 第四

教勵會本部

第六に天道の下 承前

問いかなる善根を修行してか人中天上に生るゝことを得  
 るや 答其業因量なしといへども先其大概をいはゞ十善  
 とて十種の善を畜すもの人間界天上界に生るゝあり此十  
 善に止行の二善と中事あり悪を止る即善あればこれを止  
 善といひ別に善事を顯を行善といふ一に不殺生とて物  
 の命をとらず(止善)放生とて生るを放し命を助るを(行善)第  
 一の止行の善といふ凡人を初として螻蛄等に至るまでい  
 きとし生るもの命を惜ざるのあし一切衆生の(都ての動物  
 あり)命を第一の寶とす然るを心なく鳥を捕魚を殺して食

に於て他を苦て己が心を悦しめんや誠まことに殺生せうじやうを好このむものは  
 仁にんの道みちをも害あやふぞかし釣つりすれども網あみせず其聲こゑを聞きて其肉にく  
 を食くらはずとい先まづ其甚おほしきを退しりぞけるまでにて仁あはれみの鳥とり獸けもの草くさ木きにま  
 て及およぶが仁にんの極きよく度どあり獸けものにも麒麟きりん(聖人せいじん)の生なまるゝ時とき出いると  
 いふ)の生いたる草くさを踏ふす角つに肉にくを被かて殘害ざんがいの心こころ無なしとこ  
 そきけ増まして人は萬物ばんぶつの長ちやうぞかし然しかるをいかんぞ殺害せうがいを行おこは  
 や實じつに殺生せうじやうを好このむもの(然しかるに惡あしき害がいをあすものあれい  
 人と動物どうぶつとを問とはず之これを薙除かひぞくかざるべからず是則これすなはち一殺いちせう  
 多生たせうの理りにて譬たとへの農夫のうふの莠はぐさを薙除かひぞくが如ごとし茲こゝを以もつて國家こくかに  
 司法しはふ海陸かいりく兩軍りゆうぐんの設もちけあり佛法ぶつぽうに正法たうしきほうに背そむくものを殺害せうがい

するの教けう誠まことある所以ゆゑあり鳥獸ちやうけものにも劣せうといふべし何いかに况いはんや  
 罪つみあきを殺ころし親おやみ來きたるを害がいすべけんや此故このゆゑに十惡じゅうあくの中なかに  
 の殺生せうじやうを第一だいいちに列つらね十善じゅうぜんの中なかに助命放生じよめいほうせうを最初はつめの善根ぜんこんと  
 す儒教じゆけうにも(唐からの孔子こうし等の教けう也)仁にんを第一だいいちとせりまかし早く  
 殺生せうじやう不仁ふにんの惡あくを止助命放生とめじよめいほうせうの善ぜんを行おこふべし二に不倫盜ふちんたうと  
 て金銀米錢きんぎんまいせん等らう乃至なほ芥子けいしばかりも他たの物ものを掠かすめ盜ぬすす人ひとの與あた  
 へざるを取とらざるを止善しぜんとしそれらの物ものを布施ふせするを行おこす  
 善ぜんといふなり凡おほ一切衆生いっさいしゆじやう皆貪惜みなんじやくの心こころなきこと能あたはず然しかるを  
 押おさて偷盜ぬすみをあさゝるゝ吾人われひとの正義せいぎにして人ひとの萬物ばんぶつに長おほた  
 る所以ゆゑなり抑復因果應報おさくまたいんぐわおうほうの理ことわりを認得にんとくして分限ぶんげんに應おうせぬ望のぞみ

をあすへからざるあり故に偷盜侵掠の悪を止て布施供養の善を行ふべし三に不邪淫とて妻ならぬ女を犯さず神事の佛事清淨の砌に姪犯不淨の行をあさず無禮邪の悪行を止を止善といひ梵行(梵行)の清淨の行といふ義也とて姪欲を除き禮節(古聖も五倫の道の端を夫婦にたすと述て夫婦の間の禮節を正しくすべし凡そ文明國に夫婦の禮正しくして未開の國の甚禮節を失ふもの多し佛敎の信徒たるもの宜しく己れを省るべし)を守り淨行をあすを行善といふあり急に止むべきの淫邪汚穢無禮の悪行早行ふべきの不姪梵行禮節の善根也(上の三種の身業とて身に行ふせん

也)四に不妄語とて妄は虚言せざるを止善といひ實語とて勤を眞實の徳を語るを行善といふ妄語の罪それいくばくぞ(凡そ言語の吾人の思想を表すものあれば言語の好悪の甚だ社會の交際上に關するもの故假初にも虚言惡口綺語兩舌を謹しむべし)早信を守り妄語の悪を止て誠諦の語をあすべし五に不綺語まづ綺語の道理に背ことにて強て語を飾理を枉て非に落し忠臣孝子の諫を塞物て無益の雜談戲言を綺語といふ是等の綺語を止て(止善)仁義忠孝の道をのべ三世因果の道理を(行善)不綺語道理語の止行の善といふなりそれ過去世の善根に因て人とあるから無



益えきの雜談ざつだん戲論ぎろんに空しく時日を費ついでべきにわらず防ふせべく止とどべし正道せいどう正理せいりの自他じたに益えきあり勤つとむべし行おこなべし六むに不ふ惡あく口こうとて假かりにも鹿そく荒わう罵ば詈りの語ことばをいださず止し善ぜん軟語なんごとて柔にやわ和わ善ぜん順じゆんの語ことばを以もつて稱美しょうび讚歎さんたんする行善ぎやうぜんを止し行ぎやうの善語ぜんごといふなり尤もつと罪つみの多おほき弊へい惡あく鹿そく荒わうの惡口あくこうぞかし最功徳もつとくとあるの善語ぜんごなり勤つとめて惡語あくごを止とどめ善語ぜんごを修しゆすべし七しちに不ふ兩舌りやうせつ讚さんの善語ぜんごなり勤つとめて惡語あくごを止とどめ善語ぜんごを修しゆすべし七しちに不ふ兩舌りやうせつ先まづ兩舌りやうせつといふは此人このひとに對たいして此人このひとの善ぜんを揚あげて彼人かのひとの惡あくを證しやうし彼かのに對たいしての彼かのの善ぜんを證しやうて此この惡あくを誇こり相互たがひに兩舌りやうせつを以もつて和順わじゆん睦むつじき中なかをさき爭鬪あらしむしむるを兩舌構鬪りやうせつこうとうの語ことばといふなり是等これらの構鬪兩舌こうとうりやうせつを止とどめ止善しぜんといひ又和順またわじゆん語ごと

て此人このひとを恕ゆるし彼人かのひとを諫いさめ惡あくき間まを和睦わふくせしめ他に善事ぜんじを勸すすむるを行善ぎやうぜんといふ急いそぎで兩舌構鬪りやうせつこうとうの惡語あくごを止とどめ和順勸善わじゆんくわんぜんの善語ぜんごを行おこなべし不妄語ふまうごより此このに至いたるの四種しゆしゆの口業くちやうとて口に語かたる善行ぜんぎやうあり八はちに不貪欲ふこんよくとて借かむ心こころをどしめ止善しぜん慈悲じひ仁にん惠けいとて慈惠じけいの意こころを修しゆするを行善ぎやうぜん第八だいはちの止行しぎやうの善意ぜんいとするなり九くに不瞋恚ふせんけいとて憤怒いかりの意こころを止とどめ止善しぜん柔和わやわ忍辱にんじやくとてものごと和やはらかして謗そりを報むかへず辱はじを忍堪しのびかん忍にんの心こころを修しゆするを(行善ぎやうぜん)第九だいくの止行しぎやうの善意ぜんいといふあり十じゆに不愚痴ふぐち(亦また)不邪見ふじやけんともいふあり(とて愚おろかして道理だうりに味意くちいを除のぞぎ)止善しぜん(智慧ちゐ)亦またの正見せいけんともいふ(とて理りを諦あきらめ因果いんぐわの道みちを信しんずるを)行善ぎやうぜん第

十の止行の善意といふかりたどひ博識あらずとも因果を  
 辨へ三寶を信敬し後世を恐るゝを最上の智者ありと佛の  
 説れてわればまさに因果撥無の邪見を捨廢佛毀法の愚痴  
 を除き佛法信受の正智を生ずべきことなり(不貪欲より此  
 に至の三種の意業とて意にあるの善事あり)早く貪欲瞋恚  
 愚痴の惡業を止て慈悲忍辱智慧の善業を行べし是等の十  
 善を守り五戒五常の(不殺の仁不盜の義不邪淫の禮不妄語  
 の信不飯酒の智)道に違はず忠孝を行もの人中天上に(宗  
 祖も平なるなる人喜の天と仰せられて人界の上天上に  
 對すれば因果共に劣り下四惡趣に對すれば皆勝れて喜慶

平和ある故平は人どのたまへしあり又天上の喜ある故に  
 喜の天とあそばしたるあり)生れて樂を受るあり中にどり  
 て下品の善の人界の因上品の戒善の天上に生れて樂を受  
 (前に列記せし十善に上品中品下品の三種を分つ下品の善  
 との十善の行へども其心名聞に流れ或は他に勝れん事を  
 欲するが故に阿修羅道に生るゝの業因とあるなり中品の  
 善との十善を行ふも未だ盡さざる所あるを以て人間に生  
 るゝの業因とある尤もこの人間に地獄餓鬼畜生修羅の  
 業報盡て生るゝもあり或は天上界の果報つきて生れ來る  
 もあるあり上品の善との極めて能く十善を行へ堅く五戒

を持つ者の天上界の中欲天に生るゝの業因となる其上に  
 四禪定を修行すれば色天に生れ更に四空定を得て無色天  
 に生るゝなり天上の事の繁きを恐れて今の畧す誰か斯の  
 如き善悪の業因六道苦樂の果報を聞て善を捨て惡を行ぜ  
 んや放逸にして五欲に(色・聲・香・味・觸)をいふなり着せの惡道  
 に墮なんど法華經(自我偈の末にあり)に説玉へり恐るべし  
 慎べし又まさしに知べし下地獄の苦痛より上天道の快樂に  
 至まで悉皆生じて死し死して又生ずるの苦を脱れず故に  
 六道生死の苦輪海(輪とい車)の輪の廻がごとく六道をまは  
 る義也海とい六道を海にたとひ佛敎を船にたとふこの佛

敎の船にのりて生死の苦海を渡り越して極樂の彼の岸に  
 いたるといふこゝろなりといふ若法華經無上の大善にわ  
 らずん争か三界六道の生死の苦を脱るべけん然に我  
 等今幸に受がたき人界に生を受値がたき佛法にわへり願  
 く三惡四趣の苦痛をも受ず人中天上の快樂をも希望せ  
 ず(人間)天上を快樂といふは四惡趣の苦痛に比する故なり  
 若佛の無上の樂に比すれば決して樂と云べからず况んや  
 還墮三途の苦あるをや早く三寶信仰の志を起し一向に無  
 上佛道の妙法を信じ六道生死の苦海を越へ寢光不毀の妙  
 士に至り金剛不壞の妙身を證し常樂我淨の大安樂を得時

こそ實に常住不滅の樂あるべけれ急を法華無上の大善を  
修行すべき事こそ肝要され

第四に無常を明さは

問曰仰を承はるに三惡四趣の苦痛の云も更にして人間に  
も四苦八苦(四苦の苦のこと)三號八紙に出(天上にも五衰  
五衰の相は三號十五紙に出)の憂あり殊に極て畏しき果  
報若盡還墮三途と承りたれの死して後の三惡道に墮べし  
どこそ覺ゆれ出世無漏(三界の生死を出るを出世といへ果  
報を受て漏るゝこと無を無漏と云)の善根を行して此生死  
輪回の縛を斷常住不滅の大樂を得んこと誰しも願所なり

さりながら連も人間に生たる思出先壯時の六欲(色聲香味觸法を六欲といふ六塵とも云)の樂みを樂み老ての後の  
萬事をあげうち佛をも拜み經をも讀寫僧をも供養すべし  
と存つるの如何 答曰如何ある淺ましき事を仰らるゝや  
斯六道生死の怖しく五塵六欲の勞しく墓あきことを聞な  
がら猶も色聲の塵に耽り徒又老の至るを待んどのたもふ  
こと何の謂ぞや理の通ぜざる智の及ざる前段にも申  
が如く人間一生の四苦八苦に苦られ色を見味を求るも盛  
者必衰。生者必滅。の世の間ぞかし堅とて頼べからず石も碎  
金も火に融盛の色も頼べからず花に嵐あり月に村雲あり

ろれ無常の大力に三界何ものか當るべけんされば劫火  
 起時おこるときの（佛敎にて世界を成住壞空の四劫と立つ曾て世界の  
起るべき時を成劫といひ夫より植物も生産し動物も住居す  
創造の間を成劫といひ此後幾億万年を過て世界の滅  
 損するの時期を壞劫といひ全く世界の草木山海迄燒盡て  
 空とある時を空劫といふ大海の潮汐も涸渴山海大地も洞  
然と燃出悉燒失て少の灰も残らずたゞ空々として大虚と  
あれり世界既に斯の如し増て國城聚落何ものか保べき須  
磨も荒磯と成鎌倉も曠野とありぬ春と榮夏と茂しも秋と  
散り冬と枯ぬ誰を頼にせん高砂の松さへ摧て薪と成り倉

に積財も頼れず家居も朽果ぬ况や人間の墓あき貴も忽に  
 賤しく富も忽に貧し昔の吉野に花を眺め明石の月に詠せ  
 しも老至れば力もあし昨日の殿上に詩歌を弄別莊に管弦  
 に戯しも今日の病の床に沈て起臥だにも易からず且に  
 紅顔に粉黛を粧とも夕に白骨とありて灰塵に埋れあん  
 嚴みの父母愛の妻子にも後れ親友も先だちぬ定めなき愛  
 世がたりをがぞふれば我身も數にいりぬべきかあぞか  
 無常の來ざらん老少不定の境なればいつの老をか待べき  
 ぞ稚も死ぬ若も留ず命の草露の日影を待程ぞかし出息入  
 息を待ず臨終今にありと知らずや皆人の知顔にして知ら

ぬかな必死ぬるあらばありとの謂こと勿れ今日學ずして  
 來日ありと日月既に逝ぬ水の晝夜を捨ざるが如し今の時  
 に五欲の樂に耽り後世の勤疎にして徒に老の至を待ども  
 風前の燈待ども頼ちし無常のあらし忽に吹來り斷末磨の  
 苦み骨髄に破れあは悔ども更に及まじ一息既に絶なば死  
 出の闇路を獨迷らん此時に至なば糸惜の妻子も來訪らず  
 扶助せし眷屬も來り助ず佛法の善根あらて後世の友とあ  
 るものなし急ても急へきは供佛施僧の勤經王信受の善根  
 にてこそさむらへ

正 誤

第壹

十一ページ。五行中苗のあゝ。十二ページ。七行中煩  
 腦の惱已下ノ二字同じ。十四ページ。五行中奴婢を畜ハ蓄  
 の誤り

第貳

八ページ。四行中畏竟無ハ畢。十五ページ。七行中出佛身血  
 ハ血。廿二ページ。六行中達理ハ道の誤り

第三

一ページ。五行中官殿宮七行中(今こい)より八行中巷とい

ふ)まで註段。四ペーシ、五行中慰をのかきのかく同。六行中敗。  
物の財。十三ペーシ。七行中功の切の誤りこゝに正す

明治二十年二月十日御届  
同 同月 出版

(定價金二錢)

新潟縣平民  
編輯兼出版人 高野 日 極

東京牛込區原町  
三丁目三十一番地

東京本郷本妙寺中

發行所 教 勵 會  
東京本郷區菊阪町  
八十二番地

印刷所 秀 英 舎  
東京々橋區西紺屋町

故日修聖人著  
法の道 五  
るべ

教勵會本部





第五五時の次第を示さば

仰を承はれば誠は人間一生の夢の如く芳權一朝のは  
 きも物の數ならず無常迅速にして今をもじらぬ命な  
 れバ急で後世の勤をも致すべし去ながら佛の御教區々あ  
 して經卷夥多されバ何とか修行して然るべき先佛の一代  
 の説教に如何はどの次第あるや鹿々聞まやしくこそいへ  
 答をの五千七千の略しく教は四教(化法の四教即ち藏通別  
 圓。あり下よ之を出る)八教化法の四教又化儀の四教を加ふ  
 化儀どの即ち佛一代五時の中か前四時の説法教化の  
 儀式なり)の四教どの即ち頓漸秘密不定なり初よの頓教

頓は頓直頓初の義にして最初といふことなり佛齡三十成  
 道の曉と説法今や遅いと待構へる聡明利根の大菩薩の  
 爲に最初大乘の法を説玉ふ之を頓教といふ或ひに謂く  
 頓は頓大の義にして大乘といふことありと五時の中には  
 即ち最初華嚴三七日の説法あり二の漸教漸は漸く次第  
 の義にして聡利の大士は最初三七日又華嚴の大法と聡聞  
 して轉迷開悟の利益を得たりと雖も下機鈍根の凡夫六  
 道二乘(聲聞緣覺)は更な得道の益なきが故に佛爰に於て淺  
 近ある人間天上の因果を説き君臣の間より忠義の道を示  
 し父子の間より孝行の道と教る所化の機類をして漸く

に誘引し彈喝し淘汰去て廻心向大せしむる説相を之を漸  
 教といふなり五時の中より阿含十二年方等十六年般若十  
 四年以上四十二年の説法なり三の秘密教是の前の四時  
 (華嚴阿含方等般若)の中より於て佛の神通力を以て或ひに此  
 人の爲に大乘の法を説ながらまた彼人の爲に小乗の  
 法を説或ひに此土に在りて大乘の教を説玉ふ彼人も此  
 人も互に相知ずして共に開悟得脱の益ありしむるを之を  
 秘密教といふなり四の不定教是もまた前の四時の中より  
 於て佛の唯一の教法を説玉ふ衆生の各其根性も隨て利  
 根の輩に大乘の法と聽鈍根の類に小乗の教と解す同じく

一座の説法を聴といへども而も彼と此と利益等しうらさ  
 る之を不定教といふきり以上(化儀化法の兩種の四教の共  
 ん一代五時の説法を判釋する綱目よして化儀の即ち五時  
 の教化の儀式化法の即ち五時の教化の法体なりと知べし  
 の品分れまれを我等淺智の身として説とも得盡し難し去  
 なら天台智者大師(支那國陳の末隋の初の人なり智の二  
 切經の蘊奧を究め位の六根淨の妙悟に符ふ故を以て陳隋  
 二國の帝王の師範と仰がれ玉ふ天下萬民の尊崇推て知べ  
 し)として貴き聖人のかはしませしか其説置せ玉ふ御釋(大師  
 博く一代教の權實を糺明し普く諸家の非義を擧驗し玉ふ

著述の疏釋極めて多ま然れども其本意は正しく玄義文句  
 止觀の三大部より所以ま止觀より曰く已心中の所行の法  
 門を説と而してその止觀の法門は的し法華の妙義より  
 建立を故に知天台の正意は法華の三大部よりといふ  
 ことを今この四教八教の釋義五時の次第は正まき三大部  
 む據るの構あらし承はるよ藏(三藏といふを略きてた  
 藏といふ)通別圓として四の教分れたり初は三藏教とは經(四  
 阿含等の經あり之を又は法本と譯す意は佛の金口より説  
 出せる教よきて即ち凡夫聖人の規則法度の根本とある故  
 ん)律(八十福律五部律等の戒律あり之を又は滅と譯す意は

佛の説玉へる戒律はよく衆生の悪業を滅除する故に(論六) 足論、八韃度論等あり之を又は無比法と譯す意ハ佛の最上無比の智慧を詮じ明したる論法なる故に(の三藏經律論の三の法の中はあらゆる一切の文理を説藏る故に三藏といふあり)に禪定(四禪八定等の座禪を修行して阿含經小説明したる苦集滅道の四諦の理を思惟す戒律(三歸五戒二百五十戒等の禁戒を守り身口の惡業を防ぎ威儀を正さうす)智慧(四諦の理を論じて悟りの智慧を明し顯はる)の三學を明し苦集世間有漏の因果あり苦とい第一號に述したる三果六道の我等が苦果の依身あり總て我等が苦樂の果報の

生死逼迫の相よして悉く苦なれば恐るべし厭ふべし集とは煩惱と業となりこの二の因寄合て未來六道生死の苦の果報を招集する故に集といふ斷すべし滅すべし(滅道出世間無漏の因果なり既し世間の苦を厭ひ集を滅する果の智慧を滅といふ願ふべし證とべし上は明せる禪定戒律智慧の三學の道の菩提涅槃の滅智と證得する因ある故に道といふ修とべし行とべしこの悟道に入ぬれば再度世間の六道生死の苦坑は漏落することなき故に出世間無漏といふ之に對して生死の苦果の依身を世間有漏といふなり)の四諦(諦の字ハ審理と訓す)の法を説て聲聞(十界の中の第七聲

聞界の衆生なり是ハ佛の説玉へる言教ハ聲を聞て眞理ヲ  
 悟解する位なるガ故に聲聞と云ふの弟子ハ教文凡夫外道  
 (印度ニ往昔九十五種の婆羅門宗教あり今の社會ニ行ハる  
 造化教等の宗派のみな此婆羅門の類ナカ今もの一類  
 なる證を示さバ大論(龍樹菩薩の造)ハ曰く復次ハ外道教  
 天主ヨも世界萬物を造作とぞ(耶蘇舊約書創世記第一章  
 取和華が六日にして天地萬物と造るといふ説)同ト此語  
 比ヨリて造化教の古代を考ふる其源を印度の婆羅門ニ發  
 歴山王の役ハ西漸して教意ト一變シ舊教となり再變  
 新教となりト云ふガ外婆羅門の類カる例證

教界ニ違ハるモ是等の宗教ハ佛敎の外の道カる事故  
 外道ト云ふガの辨認カる斷(世界萬象ハ眼精ニ照  
 する様ナレトモ終ニ空虛カるの思想ハ佛敎の眞見ニ  
 法ヲ未來ニ斷然カるものト思ハテ斷無の眞見ニカ  
 彼造化教ハ過去カ明カテ吉凶禍福世界ハ富カ  
 所造ニ立カるの類カテ我カテ(常)無の眞見ニ皮  
 常存の眞見カテ世界萬象ハ永遠常住カるものト  
 法(佛)の眞見(四諦)の理ハ障カテカテ煩惱ナ  
 カテ又ハ眞見ニ我カテカテカテカテカテカテカ  
 教界ニ違ハるモ是等の宗教ハ佛敎の外の道カる事故

よの邊見、是は上の斷常の二見を各一邊は執着して未  
だ中道の眞理を知ざる故、邊見といふなり。三よの邪見、是  
の因果の道理を撥無して、惡因惡果善因善果の定理を信せ  
ざるをいふ。役造化教と進んで過去の因を撥無し退ひて  
未來の果を撫無とする等の総て、哲理の原則に反する邪見と  
いふべきなり。假令彼教徒、未來の昇天墮獄の説を立るも、  
みなこれ獨一の神の心より建立するものにて、譬へば生涯  
人、物を施す人の窮難を救ひ慈悲善人と社會は稱せらる  
、人も神の心より忤ふとさの神、是を惡人として、墮獄の罰を  
與へ、また人の寶を盜む人を殺し、人の妻を姦するは、この大

惡人も神の心より忤ふとさの神、是を義者とまて、昇天の賞を  
與ふる等、總て其人の因果の如何より、果報を論ずるも、  
非ざる邪の教なるが故、之を邪見といふなり。宜あるもの  
耶蘇其人が生涯人の病を治し、人の貧苦を救ひたるもの  
報還て十字架に歿死とは實に愍むべき次第なり。今日西  
洋に於て、少しと哲理を研究するものは、斯の如き邪教を  
信せざるより、道理の社會生活する人、豈思ひざるべけ  
んや。四よの見取見、是の劣謂勝といふて、上の身見邊見邪見  
の三見は極めて卑劣の惡見、あれども顛倒の心より勝れた  
る正見と思ひ取て之を執着するあり、總て、我身の劣れたる

を願省せそ他人の勝れたるを嫉を或の不淨の肉体を淨妙  
 の好身と思ふ等の僻見あり五よの戒禁取見是の外道の戒  
 行を守れば未來の天上界へ生るゝと思ふ僻見なり近頃の  
 摩西の十戒を昇天の因と立るが如し因あらざるものを因  
 と思ひ道あらざるものを道と意得て之を修行するをいふ  
 往古鶏の死して天上界へ生れたるを見て生天の因の鶏な  
 りと思ひ定め平生鶏の真似とあしまた狗の天上へ生ずる  
 と見ての生天の因の狗ありと思ふて狗の行ひをあせしが  
 如きろの鶏狗の前世は於て天上へ生るべき善根の因あり  
 しをも了せずして一途お鶏や狗が天上へ生るべきものと

得意てその行ひを修行するといふ思ふまた甚しといふべし  
 之を因あらざるものを因と思ふて修行する僻見といふな  
 り今時西洋のある野蠻國には火を敬ひ或の樹木を禮する  
 等の宗派あり是等もみなまの戒禁取見の類ありまた神  
 を敬ふも正神邪神の隔なくわらゆる神々を信仰さへそ  
 れば善果ありと思ひ或の佛菩薩を信するも有縁無縁の  
 別ありわらゆる佛菩薩をさへ念願するも淨土へ生るゝと  
 思ふを之を道あらざるものを道と思ふて修行する僻見と  
 いふなり依て派内に於て謗法を禁るは全くこの謂あり世  
 の信佛家たるもの豈思はざるべけんや六よの疑是の物事

疑心深くして決断なきをいふ總て何事をなすも心よ  
 決断なくしての事業と成就する能はざるなり彼頂羽  
 は拔山の力ある大將なれども心不決断なき故に空しく身  
 を亡さる閻龍の歐洲の一匹夫なれども心不決断あるが故  
 に米國發見の大功を衰せしが如し佛敎を信するの徒未來  
 地獄極樂ありと聞ども誰ありて見聞せしありあらざれ  
 の覺束あきものど心不疑ひを生るより終に地獄を厭ふ  
 心も失せ淨土を欣ぶ心も起らざる様も成行結句の地獄極  
 樂あじと思ふて人まれば惡事を働き善根も遠ざかるの迷  
 ひとの云あがら最も果敢あき次第ありされば派内に於て

常々疑惑の心を第一に滅するこの難なり慎むべき事よこ  
 る七まい貪是の貪欲とて我物を惜み他の物と我物とせん  
 と思ふ風情の事ありはれへ兎角社會は欲の組織なれば  
 欲心を廢絶する譯よの至らねど欲の中にも貪欲強欲大欲  
 の爲まは身体財産をも傾くるもの最多し俚言に言せや大  
 欲の無欲は似たりと法華經に曰く諸の苦の因の貪欲を本  
 とそと恐るべきの貪欲あり慎むべきの大欲なり世の中  
 程欲暮せ欲過て欲に食はるゝ人の欲々八には瞋是のい  
 りはらだつ事なりたどひ人あかて已れお逆らふとも萬事  
 の因縁と思ひ諦らめ堪忍することを誠の人の心あき九は



疾、是の愚癡の心深くして、佛教の三世因果の道理を辨つる  
ること、牛馬等の如くなり、十は慢、是の傲慢の心、よして我  
よ、他に勝れたるものか、しと思ふて、人を輕蔑する事、あり  
佛書にも、高樓の山の頂、まは智慧の注水、ど、まら、まど、あり  
社會の青年輩、少しく思慮を、べき、あり、以上、是を、見惑の十使  
と、いふ、意の、凡夫外道、此十種の、解見、よ、よりて、種々の、惑業  
を生じ、是れ、か、身を、苦、使、する、精、な、か、を、破、し、貪、瞋、癡、慢、(土)の、見  
惑の十使の中、下の四、な、か、の、思、惑、(貪、瞋、癡、慢)の、四、煩惱、は、我  
人の、思想、よ、よ、起、る、惑、ある、故、に、思、惑、とい、ふ、この、惑の、輕、重、に  
よ、りて、來、世、六、道の、生、を受、る、な、り、され、ば、土、件、の、見、惑、思、惑、の

煩惱を斷除すれば、諸の惡業を造らざる故、又三界六道の苦  
の世界を出離するなり、を斷じ盡して、苦空無常無我(先世界  
の樂あるものと思へども、年老、体も衰へ、終、死、又、販、する、も  
の、な、れ、ば、寶、よ、の、樂、よ、あ、ら、ま、花、も、ち、り、香、も、失、ぬ、れ、ば、誠、に、苦  
の世界なる故、よ、苦、とい、ふ、世界、萬、象、の、本、來、亦、き、もの、な、れ、ど  
も、暫、く、因、縁、和、合、して、假、り、よ、生、ず、る、もの、な、れ、ば、我、も、人、も、死  
じ、山、も、岡、も、崩、れ、海、も、河、も、填、た、ら、ん、よ、の、威、本、の、空、ある、と  
是、を、空、とい、ふ、既、よ、に、縁、和、合、して、假、よ、生、ず、る、もの、な、れ、ば、常  
住の物、亦、く、悉、く、生、滅、無、常、の、法、な、る、を、是、と、無、常、とい、ふ、ま、た  
人、も、死、じ、我、も、死、する、世、の中、な、れ、ば、家、産、物、品、何、一、と、ま、て

我物とてはなきものを我人の我物顔る我を起し宮を欲し  
 施と嫌ふ何ぞ迷の甚しきや今この我を離るゝを無我とい  
 ふかりの理を悟り三界の生死を出三明(過去現在未來を明  
 らかみ見徹す通力あり)六通(第三號十三紙以下)出すとて  
 不思議の神通を得無餘涅槃(上)掲ぐる見思の煩惱を斷じ  
 盡して餘なき悟りの境界をいふの大樂を證得するを阿羅  
 漢の悟りと名づく又は聲聞乘ともいふなり

第四正誤

四紙	五行	たすのなす
同	十行	ぶせんのふの併
五紙	二行	勤をの勤て
八紙	八行	不飯酒の不飲酒
九紙	十行	行へんの行ひ
十紙	一行	中の中
同	十行	たどひのたとへ
十一紙	九行	寢光は寂光
十二紙	九行	の苦の八苦
同	八行	いへはいひ
同	十行	斷の斷
十六紙	一行	ならんならい

明治二十年三月廿九日御届  
同 四月 出版

(定價金二錢)

編輯兼出版人

新潟縣平民

高野日極

東京牛込區原町  
三丁目三十一番地

發行所

東京本郷本妙寺中

教勵會

東京本郷區菊坂町  
八十二番地

故日修聖人著

法の道  
あ  
る  
べ  
第六

教勵會本部

第五に五時の次第 (續前)

種の根性ありて諸法の因縁を好には無明行(此二は過

去の無明行の二因によりて今世に受る所の苦の果報をい

ふ謂はく識とは母の胎内に宿り始むる最初の愛心あり名

色とは父母の赤白二滯和合して母腹に宿れども眼耳鼻舌

身の六根はいまだ具足せず只形ばかりの骨肉支節等出

た智慧の光明あらざる故に行は前世の作業をいふ謂はく

無明の感によりて身口意の悪業を起し現在へ生れ出へき

因を行なふあり(識名色六入觸受)此五は現在の五果とて過

去の無明行の二因によりて今世に受る所の苦の果報をい

來たるをいふ六入とは胎内に於て初めて六根具足するを  
いふ觸とは誕生の後二三歳の時は未だ苦樂の別を辨ま  
へず只荒く觸れば泣かんとする位の時あり受とは五六歳  
より十四五歳までは已に苦樂を知り漸やく物の理を辨ま  
へて苦樂を受ることを納得するなり(愛取有)此三は現在の  
三因として未來に果報を受べき因を今世に於て作爲するな  
り謂はく愛とは十四五歳以後財寶を求め婚欲を行ずる等  
の愛着心の生ずるをいふ取とは年既に長大じて愛欲増々  
深く四方に馳て財寶を貪取するをいふ有とは正しく財寶  
婚事等を身と口と意とに恣まゝにして諸の惡業を造り未

來の惡果を率べき因業をいふ(生老死)此二は未來の苦果に  
じて過去の無明行の二因によりて現在の識名色等の五果  
を受る如く今世の愛取有の三因によりて未來にも亦生れ  
老死する果報を受るをいふ斯の如く我人は此十二の因縁  
に移されて無始より己來三世の生死止ことあじ故に佛大  
慈悲を起して此教えを設け見思の惑を破り最も慕き六  
道の生先を出しめ玉ふの十二因縁を説て三界の見思の煩  
惱を斷じ空無我(一切の諸注は本來空にして一物として我  
物としてはなき權をいふ)の理を悟り三明六通を得涅槃を證  
せしめ玉ふを辟支佛(梵語あり此には緣覺と譯す謂はく十

二因縁の法によりて覺悟する位ある故に(の悟りといひ亦  
 は縁覺乘ともいふなり又一種の根性ありて極めて慈悲深  
 く衆生濟度の志しあるには事の六度とて檀・戒・忍・進・禪・慧(檀  
 とは檀那の畧語にて梵語あり此には布施と譯す謂はく衆  
 生を憐れみて財寶妻子等より衣食身肉に至るまで布施し  
 て惜む心あし戒とは衆生の爲に有ゆる戒行を持ち身命に  
 及ぶとも犯し破ることなし忍とは他人より罵詈毀辱を蒙り  
 刀杖打擲を加へられ身命を失ふとも堪忍して瞋恚の心  
 を起さず進とは衆生の爲に幾何の艱苦をも厭はず勤行精  
 進して懈怠の念あし禪とは一切の禪定を修行して心を一

境に留め散亂心を除き若くは衆生の爲には身命をも惜む  
 ことなし慧とは般若の正慧を修じて愚痴の病を除き普ね  
 く衆生を濟度して萬法に通達し了々無碍ならしむ菩薩(具  
 には菩提薩埵といふ梵語なり此には覺有情と譯す謂はく  
 一切の情あるものを覺悟せしむる義あり)此六法を修行し  
 て衆生を濟度する故に六度といふあり(の修行を説教は三  
 阿僧祇(梵語なり此には無數と譯す謂はく三無數劫あり)百  
 大劫(劫をば分別時節と譯す謂はく人間の壽命八萬四千歳  
 なるを百年毎に一歳を減して最後に壽命十歳に至り又百  
 年毎に一歳を増して原初の八萬四千歳に至る是の如く一

減一増を一小劫といひ二十増減を一中劫といひ八十増減を一大劫といふの間難行苦行して最後に閻浮提に生じ見思の煩惱を斷じて三界の生死を離れ空無我の悟りを開き三明六通等の無量の神力を備へ三十二相八十種好(佛身に於て其身を莊嚴し金色の佛身を成じ四諦の法輪を轉し佛の説法を轉法輪といふ)諸の衆生を利益し然して無餘涅槃に入ことを得ると示し玉ふ是を菩薩乘といふなり劫の如く聲聞緣覺菩薩の三乘に四諦十二因緣六度の法を教え俱に見思の煩惱を斷じ三界の生死を出空無我の理を悟り無餘

涅槃に入と説玉ふを三藏教とはいふなり次に通教とは前の三藏教よりも勝れて諸法の當位を動かさず當體即空の旨を明し傍はらには聲聞緣覺の二乘に教え正しくは菩薩に教え玉ふなり三乘ともに通じて般若の空慧を學び同じく見思の煩惱を斷じ共に三界を出同じく空理を悟り無餘涅槃に入ると教え玉ふを第二の通教といふなり次に別教とは前の藏通二教には似るべくもかく獨菩薩の爲に大乘の教を説き唯見思の煩惱を斷じ空理を悟り三界六道の生死を出るのみならず二乗の空無常(一切の方法は悉ごとく生住異滅の四相に遷されて轉變常なき様をいふ)の



悟りを起して菩薩の万善万行無量の功徳を説き塵沙(菩薩の行々に障る煩惱あり其相微細にして塵沙の如し)とて一切の事法に味き惑を盡し十二品の無明(明々たる佛性の悟りを隠す煩惱なり)を断じ十二品の中道(一切の方法は眼前に歴々としてあれども終には空無に歸するものと観ずるを空觀といふ諸法は既に空あれども因縁和合して假に現出せるものと観ずるを假觀といふ然るに方法の實體は空無にもあらず假有にもあらずと観ずるを中道觀といふなり西洋哲學者中にもろつく氏は經驗論を立らるが如し氏は本然論を唱へかんて氏は二者統合論を立たるが如し

佛性の理を悟り分段變易の生死(分段の生死とは六道の境界にして一界毎の分々段々の生死の身をいふ變易の生死とは三乗の境界をいふ此境界に入るときは一界毎に別身を受るにあらず唯悟りの智慧の變り行くのみある故に變易の生死といふ)を越へ妙覺として上もなき佛と成よしを説玉ふを第三の別教といふなり次に圓教とは此上もあき尋とき教えよして前の藏通別の三教をば小乗方便權教の體法と下し唯見思の煩惱を断じて六道分段の生死を越るのみならず煩惱即菩提生死即涅槃と明し一切象生の迷ひの當位を佛性中道の悟りと顯はし界外(三界六道の外ある三乘

の境界をいふ塵沙の煩惱を滅し四十二品の無明(圓教の佛  
 に四十二位の階級あり謂はく十住十行十回向十地等覺妙  
 覺なり此四十二品の悟りに障る煩惱を四十二品の無明と  
 いふあり)を斷破し變易轉改の生死を離れ中道實相(方法の  
 當躰空にも非ず假にも非ず而も空而も假にして自己の一  
 心即ち森羅三千の方法方法即ち自己の一念と達し有  
 無の二道に偏せず黨せず公明正大の教えなるを中道實相  
 といふ例せば西洋哲學者にも唯物に偏するあり唯心に偏  
 するありて終りに物心二元論起り或ひは主觀を取り客觀  
 を取るありて理想論起り二觀を調和して初めて真正の哲

理を得たりと稱するが如し誰か計らん印度三千年前の佛  
 教一朝西漸して近世哲學と詩稱し海外に傳播せることを  
 豈知んや彼哲學の眞理は未だ我佛敎に明せる圓融三諦(空  
 假中の妙理に及ばずと云ことを)の妙理を悟り不思議寂光  
 の妙土を感じ無始無終の法身(佛性法身は本來生死なし故  
 に無始無終あり)を證得し究竟妙覺の佛躰を成ずるあり此  
 妙覺極果の佛より見れば藏通二教の佛は凡夫の如く別教  
 の如來は圓教第三行の菩薩よりも劣れり(別教には唯十二  
 品の佛位を明す故に圓教の四十二位の中の初めの十住及  
 び十行の中の第二行に至る十二品の位に相當す依て別教

の極位の佛は未だ圓教の第三行の菩薩にも及ばざるなり  
 斯の如く最上圓滿の教をされば圓教とは云あり佛此四教  
 を説玉ふに華嚴(最初三七日の説)阿含(次に十二年)方等(次に  
 十六年)般若(次に十四年)法華(次に八ヶ年)涅槃(最後一日一夜  
 の説)以上これを一代五十年といふの五時の次第あり 第  
 一に華嚴の時とは上の四教の中には唯別圓頓大の法のみ  
 を説き獨り大菩薩に教えて二乗は座におれども驢廬の如  
 く増て成佛は思ひもよらず佛菩薩の高貴あることを明し  
 影現の報身報土(誠どの報身報土は佛菩薩の境界にして此  
 娑婆凡夫の境界にあらず故に佛の通力を以て暫らく眞の

報身報土の影を華嚴説法の砌りに現するのみ)を示し未來  
 際を盡して法界の法門を説玉ふされども猶別教の方便を  
 兼て二乗の成佛を許さず佛の久遠を隠せり故に一切衆生  
 皆成佛の法にあらず猶方便の説あり 第二に阿含の時  
 は一向に淺き小乘三藏の法のみを説き二乗の菩提を明し  
 て衆生成佛の法にあらず故に佛の本懐にあらず 第三に  
 方等の時是大集經淨名經。金光明經。阿彌陀經。大日經等の  
 數多の經々を説玉ふなり上の阿含三藏の小乘に對して通  
 別圓の三大乗教を説き彌陀藥師等の十方の淨土を明して  
 阿含の十方唯一佛の權説を破し二乗を彈喝して永不成就

佛の者を嫌ひ四教俱に説て三乗の菩提を成ぜしめ玉へば  
 是亦一切衆生皆成の佛の本懐にあらす 第四に般若の時  
 是に大般若光讚般若仁王般若等の諸の般若經を説て三乗  
 に教を般若の空慧を悟らしめ玉ふといへども猶通別の方  
 便を帯じて圓教を説玉へば是亦如來出世の本懐にあらす  
 故に亦二乗の成佛を許さず 第五に法華の時正直に兼通  
 別の方便權説を捨て但一實無上の圓教をのみ説て九界地  
 獄餓鬼畜生修羅人間天上聲聞緣覺菩薩の一切衆生に教を  
 玉ふに一會の大衆悉ととく成佛の素懷を遂畢んぬ是を十  
 界(九界に佛界を加ふ)皆成の妙法蓮華經といふあり凡そ

佛の本意は直に法華の一乘を説て衆生に悟らしめんと思  
 召せども衆生の根鈍にして叶ふべからず故に如來成道ま  
 じくして前四十餘年には華嚴阿含方等般若の四時の經々  
 を説て衆生の根機を調のへ方機淳熟して佛胎七十有二初  
 めて十界皆成の法華經を説玉ふに六道の衆生惡業煩惱の  
 當位に佛の知見を開示し玉ふ况んや不殺不盜の五戒十善  
 散華燒香の微善に於てをや皆悉ととく成佛得脱の因縁な  
 りと明し玉へり誰か此功德に漏へけんや是を以て邪見の  
 嚴王も沙羅樹の佛記(妙莊嚴王未來成佛して沙羅樹王佛と  
 名を記し玉ふ)を蒙り五逆(阿羅漢を殺し僧の和合を破り佛

の身より血を出し阿闍世に教えて父の王を殺さしめ母を殺さんとす。是を提婆の五逆罪といふの提婆も無間の當所に天王如來の開覺を成し五障(女人に五障あり一には梵天王と成こと能はず二には帝釋と成らず三には魔王とならず四には轉輪聖王とあらず五には佛と成こと能はずと爾前經の意あり)三從(幼なくしては父に從がひ嫁しては夫に從がひ老ては子に從がふと儒典の意あり)の女人畜生の身たる八歳の龍女も變成男子の奇特を顯はし菩薩の修行を備へ即身に南方無垢世界の成道を遂玉ふ志かのみあらず爾前四十餘年の間永不成佛と斥はれし舍利弗目連等の二

乗の輩も皆悉ごとく劫國名號(成佛の年數國名及び佛の名號)の記別を受玉ふ然れば則はち一切衆生残りなく成佛せしめ玉へば如來出世の本意も満足し如我昔所願今者已満足。化一切衆生皆令入佛道と佛は悦ばせ玉ふ其上一代諸經にこれなき久遠實成の旨を説顯はし玉へば誠に諸經の中の大王の如く最極無上の金典なり次に涅槃經是は法華經と同じく第五時の内にして醍醐の妙法にてはあれども猶後番後熟の追説追泯(一代五十年の説法の座席に後れ漏れたる者を拾ひ集めて隨がつて説隨がつて悟らしむる教ある故に亦是は捨捨醍醐の經ともいふあり)とて四教俱に説

玉へは未だ法華の純一無雜(法華は唯圓教の一實のみを説  
て餘の方便の教を雜えざる故に)には及ばざるあり以上初  
め華嚴より終り法華涅槃に至るまで如來一代五十年の説  
教の大概を記すのみ猶委しくは知識の上人に就て習學せ  
らるべし同じく後生を願はんとならば正法正師の正義を  
信じてこそ來世の得脱をも遂べけれ相構えて一大事なれ  
ば努々鹿零とろとろあく第一の要法を撰えらんで修行しゆぎやうあらまほしくそ  
侍まる

第五號正誤

- 四紙 五行身は身
- 八紙 四行合あひ今いま
- 十紙 四行役やくの彼か
- 十八紙 三行悟さとりの悟さとり

明治二十年七月廿七日御届  
同 八月 出版

(定價金二錢)

新潟縣平民

編輯兼出版人 高野日極

東京牛込區原町  
三丁目三十一番地

東京本郷本妙寺中

發行所 教勵會

東京本郷區菊阪町  
八十二番地

印刷所 秀英舍

東京々橋西紺屋町

故日修聖人著

法の道  
志るべ  
第七

教勵會本部



六標ニ諸師異解ニ彼非圓



六標ニ諸師異解ニ彼非圓  
 云仰に随へて随分と方々の  
 人の仰には經卷を讀誦し或は之を書寫する等は徒とどの  
 よし子細は佛の御語にも修多羅梵語あり此には經と翻ず  
 聖教の都名ありの教は月を指す指の如く月を見しうへは  
 指を詠て何かせんるれよりも早く座禪入定をもじ自分の  
 心を研き佛性をも悟り出してこそ三界の苦樂をも離べけ  
 れ佛も眞實の悟の法は經にも説給はず教の外に別に傳へ  
 て文字を立ず心を以て心に傳へ禪法を以て成佛せよと迦  
 葉尊者に私語せ玉ふよし法華經等を讀題目も唱るもの

は譬へば貧賤の者の徒に隣の貧を數ふるとも己に於て半  
 錢も足にあらざるが如く虛戲の(教)は能詮の理は所詮なれば  
 法華の教相に依りて不思議三諦圓融の理觀を知見し題目  
 の近名に憑りて無相の極理に通達するものあり争ぞ株蹄  
 を固守して魚兔を失却する憾あらん若し教相に憑らずし  
 て直に觀理に達せんと計するものは宛かも盲の色を辨し  
 跛の道を行に異あらず是甚虛戲の行あるべし(行)あるよし  
 仰せられけるはいかゞや(已)上は第一に禪宗の意を以て  
 問也)又或智者の仰には法華經は釋迦如來の教の中にてこ  
 そ尊けれ大日遍照如來の説せ給ふ密乘大日經等に對すれ

ば第三戲論(彼宗の者の云大日經第一華嚴經第二法華經第  
 三と)とて小兒の戲に齊し顯教(法華經等)のことありの三身  
 (三身とは法身。報身。應身。ありこの三身は最佛教の蘊奧骨目  
 なれば一二の辨解得て盡し難けれども且く一毛を示さば  
 初に法身とは即理體にして所謂希臘古代の哲學家たる比  
 多古羅氏の哲理論中即ち万物の原種は絶對唯一の理體に  
 して其中に万物を合藏すといふに類す次に報身とは即智  
 力にして比氏の所謂纏縛を脱し常住を全ふせんと欲せば  
 我人本來固有の智力に由らざるべからず智力獨り能く万  
 差の迷相を破り唯一の眞理を開く事を得ると説たるに類

す三に應身とは即事相にして比氏の所謂唯一の純理開發して万差の諸象となる云々と辨ぜしが如し或論に喩あり法身は月の體の如く報身は月の光の如く應身は月の影のごとしと旨あるかは此三身を開發する時を成佛といひ此理に迷ひ妄想する時を天人鬼畜といふ言を換て辨ぜば哲理に達するを悟の佛といひ哲理に通ぜざるを迷の衆生といふ釋迦如來などは履取車押などよりも履しきものよし仰せられけり(已上は第二に眞言宗の意を以て問之)又或智識の仰には法華經は勝て尊くおはしませども聖道難行とて我等衆生の拙なく愚あるものゝ修行には僻事にてそ

れ故に先師も法華經をよみ題目など唱ふるは雜行雜修とて往生の妨あり彌陀念佛こそ百即百生とて愚痴無智の者のいと易く往生する大善根にて侍るおといひ(已上は淨土門の意を以て問之)或は有學匠の日後生の善根は免まれ角まれ現世の祈には眞言ならては叶ひ申さずおといひ(已上は現世の祈に就て問之)或は藥師如來ぞ能たすけ給ける地藏尊子頼なると申華嚴第一子般若最勝ぞなど傳へて(已上は雜問)種々の經釋を引さまゝの道理を述て我もくど彼の宗々の勝るよじ口々にのゝしりしが何をか修行せんと心も迷ひ遲疑して決する能はず抑佛は何をか第一と説

定玉へるや聞まぼじく予侍る  
 答我等は短才淺智にして廣くも學び得ず其上私の語を出  
 さば又もや迷の種となるらん去ながら聊か先師の意を傳  
 へ管見の經釋を演ん涅槃經に依り法不依人依了義經不依不  
 了義經と説せ給ふ此意は佛の第一の御經に依て人の語に  
 は付べがらず人師の語(人師とは和漢諸宗の祖師等をいふ)  
 用捨時に隨ひば唯佛説をこそ先とすべけれされば法華經  
 の序分無量義經に(法華の三部經といふことあり無量義經  
 壹卷○法華經八卷○普賢觀經一卷○已上之を三部とす中に就き  
 無量義經は爾前權經と法華實經との境界にありて尤偏圓

を簡釋せし經あれば載ち之に依て法華興することを得故  
 に法華の序分とす(曰く初説四諦十二緣(第二時)の阿含經を  
 指す)次説方等十二部經(第三時)の方等經にして則眞言宗の  
 大日經等も淨土宗の阿彌陀經等も禪宗の楞伽經等も皆此  
 部に攝す摩訶般若(第四時)の般若經なり華嚴海空(超へて初  
 時)の華嚴經あり今淺より深に至る次第を用ふ(宣説菩薩歷  
 劫修行と説給へり斯前經の名を悉く呼擧て歷劫修行とて  
 佛に成がたきよじを極め給ふ又性欲不同種を説法以方便  
 力四十餘年未顯眞實是故衆生得道差別不得疾成無上菩提  
 と説給ふ此意は如來出世して四十餘年がほどは衆生の根

性種々あれば華嚴(三七日)阿含(十二年)方等(十六年)般若(十四年)等のさまの教經を説つれども本より九界の(地獄界。餓鬼界。畜生界。修羅界。人界。天界。聲聞界。緣覺界。菩薩界。の九界なり)衆生の迷の意に(萬法差別の相)隨ひて説しゆへ唯假の方便にしていまだ眞實の法華經をば顯さずされば衆生の得道も聲聞緣覺菩薩の權果にして實の悟には非りけり。とこそ宣玉ひり去によりて大莊嚴菩薩等の一會の大衆も此仰を承て過無量無邊不可思議阿僧祇劫終不得成無上菩提とのべ行於險徑多留難故と領解し給ひしぞか心此意は大日經阿彌陀經等の教法禪律等のあしへは不可思議劫とて

心にも口にも思ひ議れぬほど久き際修行するとも險徑とて險しき小徑へいりていろく様々の艱難のみ多く直ある道にあらざれば終に無上菩提の佛とは成ずと演玉へり。隨て正宗の法華經には世尊法久後要當說眞實(方便品)とて此眞實の法華經をば四十餘年の久き後に説給ふよし又正直捨方便但說無上道(方便品)とて今此法華經は九界の衆生の迷ひの意に隨はず隨自意とて佛の御意の儘(有空の二に偏せざる中道實相)に諸の方便權教を捨て但正直に佛になる道ばかりを説と名のらせ玉へりしかのみあらず已説(前四十餘年の華嚴阿含方等般若なり)今説(法華の序分たる無

量義經なり(當說)後に説ん涅槃經等なり(而於其中此法華經  
 最為難信難解諸經中王最為第一(法師品)と説せ玉ひぬ此意  
 は前に説し經にも今説る經にも後に説んずる經にも此法  
 華經は勝玉ひて諸の經法の中の大王の如く最第一の御經  
 あるよし演させ玉ふ是に依て多寶如來は寶塔の中より妙  
 法蓮華經皆是眞寶(寶塔品)と此經の證據にたち玉ひ彌陀藥  
 師の十方の諸佛は此土に來集して(來集せられしは寶塔品  
 なり)誠諦の御舌を出して(神力品の吐舌相是あり既に彌陀  
 藥師等も法華經を證誠し玉へり請ふ看客依注不依人の金  
 言に住して意を此に注ぎ給ひ)此經第一の佛説を助させ

玉へり若此經を持が僻事あらば何とて若有聞法者無一不  
 成佛(方便品)とのべ讀持此經是眞佛子(寶塔品)と説玉はんや  
 若人此經を聞ものあらばひとりも殘さく佛に成ぬ眞の佛  
 の御子とこそ(已上は)物答(又題目を唱ふるが隣の寶を數  
 るあらば受持法華名者福不可量(陀羅尼品)とは説玉ふまじ  
 題目信受の功德は無量と夥しくこそ侍れ文字即解脱に  
 て一々文々是真佛あれば不立文字の限にはあらず(已上は  
 第一答)又若此法華經は顯教にして秘密に非第三戲論に  
 て下賤の法なりといはいは佛はあぜか此法華經是諸如來第  
 一之説於諸經中最為甚深(安樂行品)とのべ此法華經如來秘

蜜之藏のほよに於諸經中しよきやうのなか最在其上さいくわいじやう安樂行品あんらくぎやうひんと説玉とまはんや大日如來だいじつにょらい  
 勝すぐれさせ玉たまふとも諸佛如來しよぶつにょらいの外ほかあらず眞言尊しんごんぞんしども諸經しよきやうの  
 中ちゆう之法華秘蜜ほつけけひみつの下しもにあること誰たれか疑うたがふべけんや第三戲論だいさんぎろん  
 とは人の語ことばにして最爲第一さいふだいいちとは教主釋尊けうしゆしやくそんの金言きんげん予やかし誰たれ  
 が如來にょらいの語ことばを捨て人の私わたくしの語ことばに付つべけんや（已上は第二答）  
 又また法華經ほつけきやうは千中無一せんちゆうむいつにして百即百生ひやくそくひやくじやうの念佛ねんぶつの妙行めうぎやうに及およば  
 ず聖道門せいだうもんにして往生わうじやうの易やすに如しかずといふとも假使たごひは徧法界へんぽうがい斷た  
 善諸衆生ぜんしよじゆうじやう一聞いつもん法華經ほつけきやう決定成善提けつぎやうじやうじやうぜんたいとこそありければ如何いか様よう  
 ある惡人あくじんなりとも此經このきやうの題目だいもくたゞ信しんせば成佛ぶつはうたがへ  
 あるべからず滅後惡世めつごあくせの法華經ほつけきやうを信しんずるものを佛ぶつは是人ぜじん

於佛道決定無有疑神じん力りき品ひんと定めさせ玉たまひ後五百歲ごひやくさい中廣宣ちゆうくわうせん  
流布藥王品やくわうひんと説とませ玉たまへば末法惡世まつぽうあくせに至いたりてこそ法華經ほつけきやうの  
 利益りやくの時ときなれば罪つみの多おほき衆生じゆうじやうこそ別べつして法華經ほつけきやうをば持たべ  
 けれ（已上は第三答）されば今の時は貪おん瞋しん癡ちも愈盛いよくさかんに罪業ざいごふも  
 深重しんじゆうされば法華無上ほつけむじやうの大善だいぜんにあらずんば助たすかり難かたし此法華このほつけ  
 經きやうの修行しゆぎやうをば天台大師てんたいだいしは行淺功深ぎやうせんこうしんと稱歎せうたんし玉たまへしぞ分別ぶんべつ  
 品ひんには一念いっげんも信解しんげする功德くつとくは五波羅蜜ごはらみつ梵語ぼんごなり此こには到いた  
 彼岸ひがんといふ謂いく此こを修しゆすれば生死しんじの此岸こしより涅槃ねはんの彼岸ひがん  
 に到いたるといふ義ぎなり何をか五ごとす謂いく布施せ持戒ぢけい忍辱にんじやく精進しんじん  
 禪定ぜんぢやうあり其その義趣ぎしゆの第六號四紙だいろくごうししに出いづの行ぎやうに超こて菩薩ぼさつの久ひさ

しき岡布施も戒を持ち座禪入定などして怠る難行苦行  
 も玉ふ功德よりも勝るよしを説き隨喜品には五十展轉  
 隨喜の功德とて法華經の御功德の勝させ玉ふことを段々  
 に傳へて五十人目に至りあは疎なる隨喜にてあれど  
 も八十年が間諸の衆生の意に隨て金銀衣食等を布施する  
 功德よりも勝るよし説玉ふかやうにやすき易行の又と  
 もあるべきや行大直道無留難故と無量義經にて見へたり  
 此法華經の佛に成やすく修行し易事何の經か及ぶべきい  
 はんや我等の本師釋迦如來は今此三界皆是我有其中衆生  
 悉是吾子而今此所多諸患難唯我一人能爲救護(譬喻品)とこ

そ説玉へたり彌陀如來藥師如來は西方東方の衆生の爲に  
 こそ本師なれ此娑婆世界は皆此南無妙法蓮華經の御領分  
 我等衆生は釋尊の御子なれば此題目を聞て外の主人を願  
 ふべからず唯我一人の本師の外は苦患をも救ひ災難をも  
 護玉ふはこれあし况や阿閼佛も阿彌陀佛も眞實の御誓願  
 の日は常樂説是妙法蓮華經(化城品)とこそ説玉ふ何とて  
 四十餘年の方便未顯眞實の權教たる大日眞言の法を信じ  
 彌陀念佛の行を願て法華眞實の妙教を抛んやいはんや禪  
 律等の入師の所立を尊て佛立法華の妙宗を聞んや若人  
 信毀謗此經即斷一切世間佛種(譬喻品)と説玉へば恐て惶



べきは題目不信毀謗の大罪あり念佛眞言禪律等の權教權  
 宗を以て法華經をいひ踈法華經の行者に離をあし憎嫉輕  
 しむる者の罪報を法華經の譬喩品に説て曰其人命終入阿  
 鼻獄阿鼻は梵語なり此には無間といふ蓋苦を受けるに間斷  
 なき故に即無間地獄なり方所等は第二號初番已下に出具  
 足一劫劫のことは第六號五番に出劫盡更生如是展轉至無  
 數劫劫從地獄出當墮畜生云云餘の餓鬼修羅等の惡道を極と  
 し多の苦を受猶人間に生ことを得とも貧窮下賤盲聾瘖瘂  
 多病短命いまよのなかを觀るに貴賤高下貧富苦樂強弱利  
 鈍等の差別あり是即順應と遺傳とに依ものとはいへども

或は之に係はらざることありしかるにこの御經の意あら  
 ば貧窮下賤盲聾瘖瘂多病短命等は過去世に法華經をうし  
 りたるもの、此世に生れ罪報によりて受るところの業感  
 なりたそるべし等の諸の惡報を受三寶の名をだに聞かず  
 罪を獲事きはまりあしと演させ玉ふ相構て疑感謗法謗法  
 とは妙法を謗るばかり謗法にはあらず先師も謗は背なり  
 とねしせられければ法華經のねしへにそむへて念佛等を  
 信ずるがすなはち謗法ともうすぞかしの心を去りて題目  
 修行の志を勵玉ふべし已上は雜答なり

明治二十年九月三日御届  
同月出版

(定價金二錢)

新潟縣平民

編輯兼出版人

高野日極

東京牛込區原町  
三丁目三十一番地

東京本郷本妙寺中

發行所

教勵會

東京本郷區菊阪町  
八十二番地

印刷所

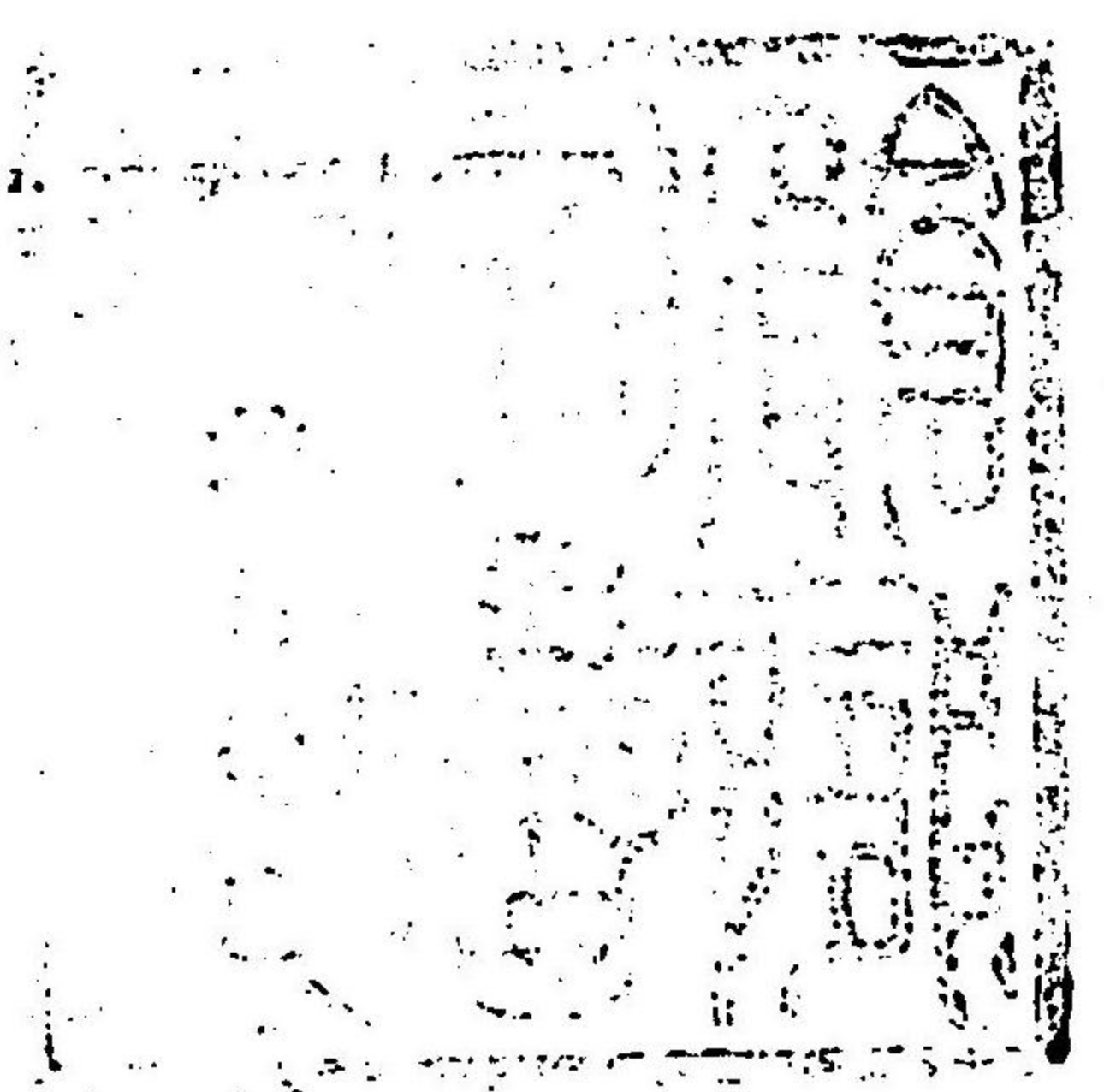
秀英舍

東京今橋西紺屋町

故日修聖人著

法の道  
志るべ  
第八

教勵會本部



第六標諸師異解驗彼非圓 (續前)

又法華經は現世の祈禱とはあらずと仰せらるるが經文

には現世安樂餘生善處と(藥草品に)說せ玉へば何の不足か

あらずと諸天夜常爲法故而衛護之と(安樂行品に)あれば

らざらん破諸魔賊壞生死軍諸餘怨敵皆悉

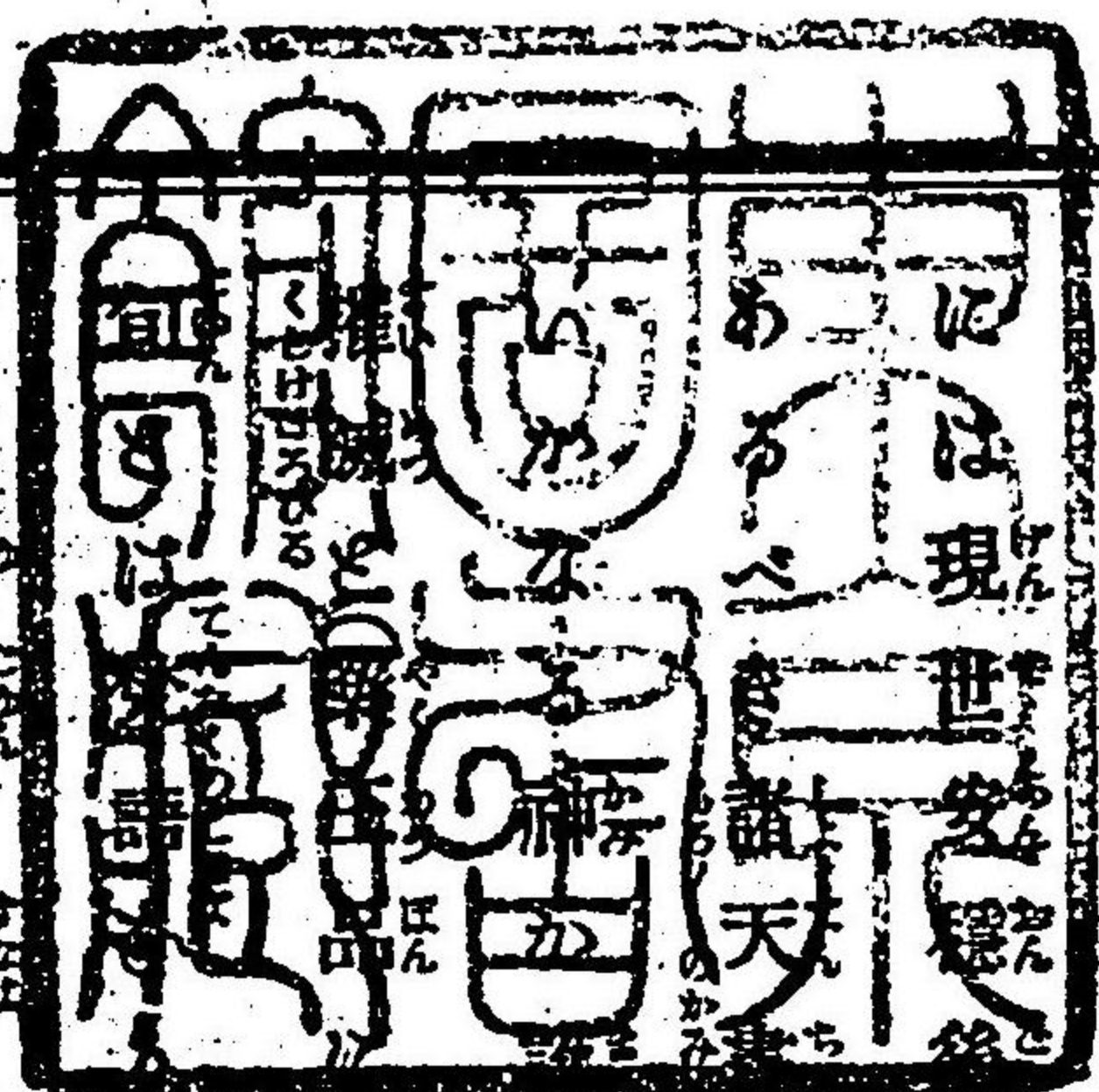
あれば何れの難か退かざらん令百由旬(由

此には限量と翻す四十里を以て一由旬と

す百由旬は即ち四千里あり)内無諸衰患と(陀羅尼品に)說玉

へは何の災難か來るべけん閻浮提人(吾等所住の國土を佛

教には總じて閻浮提といふ)病之良藥若人有病得聞是經病



即消滅不老不死(樂王品)是(好良藥)今留在此(即取服之)毒病皆  
愈(壽量品)に(宣王)へばいかある病か治せざらん(受持法華  
名者)福不可量と(陀羅尼品)にあれば來らぬ福やあるべき所  
願不虛亦於現世得(其福報)と(普賢品)にあれば叶はぬ願やあ  
るべき三毒七難二求兩願(三毒とは貪欲嗔恚愚癡なり七難  
とは火難水難暴風難刀杖難惡鬼難囚獄難怨賊難)あり二求  
兩願とは人ありて男子を求むることを願はぬ福徳智慧あ  
る男を得ん設女子を求めば(端正有相)にして(衆人に愛敬)せ  
らるゝ女を生んと斯の如く三毒七難を拂ひ二求兩願を満  
ずるは皆妙法信心の功によると法華の觀音品に(說玉)拂

はぬ災難も亦く満ざる願もなし但し(驗の)遲速は信心の厚  
薄と(罪業の)輕重とによるべし現世の祈はいふも更なり過  
去遠々劫の惡業をも滅し未來永々の苦患をも脱かれ無上  
の佛道をも成就せんこと(經文)空しからず(金言)疑ひなし増  
て現世は假の宿一夜の夢の中ぞかし何事も前世の因縁な  
れば福をも羨むべからず難をも愁ふべからず唯得るに任  
せて營むべし。過去よりも未來へ通ふ假の宿。雨ふらばふれ  
風ふかばふけ。毎自作是念以何令衆生得入無上道速成就佛  
身(壽量品)とは佛の常の慈悲なれば急て經をも讀誦し題目  
をも唱へ不毀の淨土に至り久遠の如來を拜し奉らん時こ

そ三災(火災。水災。風災。)八難(飢。渴。寒。暑。水。火。刀。兵。)の憂もあく園  
 林寶樹の園には佛乘微妙の花開き菩薩不思議の天人衆は  
 常に常樂我淨の樂を奏し自受法樂の遊こそ寔に眞實の樂  
 みあるべけれ(自我偈の經文に我此土安穩天人常充滿園林  
 諸堂閣種々寶莊嚴寶樹多華果衆生所遊樂諸天擊天鼓常作  
 衆伎樂とは此意あり)急々信心の歩を進め後世の修行あら  
 まほしくぞ侍る(已上現世の祈に就ての答)。  
 第七宗祖の正義を尋ねて題目肝要の旨を知しむ  
 問曰仰を承はれば如來一代の説教の中に此法華經第一の  
 ること經文明白にして誰か疑はんや但し法華經を信ずる

にも二十八品の志な別れたるよし又人の説を承はるに本  
 迹とやらんの分もこれあるよし又法華經にては何物か勝  
 れて尊き法門なるや同く信じ申すあらば勝れていみじき  
 法を修行して後生をも助かり度ぞ侍る宗門の祖師は何様  
 に仰せ置れしや承はりたし答法華經にて今生後生の助け  
 と成申す肝心の法門は法華經一部八卷廿八品并に八万法  
 藏五時四教(第五號六號に委し)の肝要たる南無妙法蓮華經  
 の五字七字にて侍り是を口にも唱へ意にも念じて今生の  
 祈禱にもし未來成佛の種ともなし申すあり(成佛の種とは  
 吾等が平生唱ふる所の題目にして之を本因妙下種の題目

と習ふなり本因妙とは壽量品の教主釋尊久遠五百塵點劫の當初我本行菩薩道とて若干の時節を経て佛に成べき道を修行ありしを是を本因の妙法蓮華經と云ふ此本因妙修行の功によりて得させられたる悟の智慧を本果の妙法蓮華經とは云あり釋尊既に此本果の妙法を得玉ひてより不老不死の長壽を持て三世常住の娑婆世界に住し常に妙法を説て衆生を教化し又處々に應身を現じて一切を利益し世々に法輪を轉じて群生を濟度し玉ふ是偏に本因の修行に由て獲玉ひたる本果の妙用なるべし今日も亦二千餘回の往昔印度に降誕し十九出家三十成道の儀を示して一代

五時の法門を説最後に眞實無上の妙法華經を説て一切を利益し猶滅後の吾等衆生を濟はんとして本化の菩薩を召し上行菩薩に壽量品の題目を授け玉へば佛勅默止難く日本國に現生し自ら日蓮と名乗り高聲に本門の題目を弘通して吾等衆生の心田に成佛の種子を下し玉ふ吾等此教に隨順して日夜朝暮に唱ふる所の題目は併し乍ら久遠實成の釋尊本因修行の題目にして頓て一息切斷の夕に達る所の三身常住の開覺は取も直さず釋尊の久遠本果の成道あり爰を以て高祖觀心本尊抄に釋尊の因行(本因妙)果徳(本果妙)の二法は妙法蓮華經の五字に具足す我等此五字を受持

(今身より佛身に至る迄持つ所の本因の行業ありすれば自然に彼因果の功徳を譲り與ふ)終焉の際に開覺を遂る所の本果の成道なり)と云云派内の信徒たるもの深く眼を此祖判に晒し意を本因下種の題目に注ぐべし之に依て此題目をば天台大師も一代經の總要と仰せられたり(傳教大師の相傳に云く天台大師毎日行法の日記に讀誦し奉る一切經の總要毎日一万反といへり一切經の總要とは妙法蓮華經の五字ありと云云天台大師六根清淨の位に住し玉ひてすら毎日一万反の題目を唱へ玉ふ吾等凡夫は彌日課の修行を勵むべし)宗祖大聖人も(報恩抄に)序品の上の妙法蓮華經

は一部八卷廿八品の肝心またく一代經の肝心三世十方の諸佛の御魂とそ仰せられたれば廿八品には此題目の功徳を説廣げさせ玉へるなり又此題目の蓮華の二字はり事起りて本迹二門の沙汰あり先迹門の妙法蓮華經と申すは華をば爾前法華以前の華嚴阿含方等般若等の四十二年の教經を云ふ)の四味(一代五時の説教を五の味に譬ふるなり一には乳味華嚴に譬ふ二に酪味阿含三に生酥味方等四に熟酥味般若に譬ふ以上之を爾前四味と云ふ五には醍醐味法華に譬ふ諸味の中には醍醐味最上あり諸經の中には法華經第一あり三教(藏通別)を三教といふ委しく第五號



六號に出すの權教方便に譬へ蓮をは佛乘法華の妙法に喩  
 ふるなり之に就て三義あり蓮の爲に華を生じ(是)一華開て  
 蓮現はれ(是)二華落て蓮成ずる(是)三の三の次第あり是即ち  
 法華の一佛乘を説玉はん爲に先四味三教の權教方便を施  
 し(是)一其方便の權門を開て法華眞實の妙理を示し(是)二却  
 て正直に諸の方便權説を捨て但法華無上の一乗のみを説  
 玉ふ(是)三に譬ふるなり此妙法の功徳を述門十四品別して  
 は方便品に於て説顯はし玉へば爾前四十餘年がほど嫌は  
 れし惡人も女人も二乗も都て九界の衆生残りなく成佛し  
 畢んぬ此を述門の一念三千開權顯實二乗作佛の一大事と

申すあり凡そ一代經廣しと雖も此一大事の法門は法華經  
 の外には曾てこれあし故に高祖大聖人も(開目抄に)述門に  
 は一念三千二乗作佛を明して爾前二種の失一を脱れたり  
 と遊ばし玉ふなり次に本門の妙法蓮華經と申すは華をば  
 始成正覺の迹に譬へ蓮をば久遠實成の本に譬ふ是に亦蓮  
 より華を生じ(是)一華敷て蓮現はれ(是)二華落て蓮成ずる(是)  
 三の三の次第あり是は久遠(五百塵點)の本果より爾前述門  
 (十九出家三十成道等の始成正覺)の權迹を垂れ(是)一其迹門  
 の近果を開して本門壽量の本果を顯はし(是)二却て其爾前  
 述門の始成正覺の近迹を廢して本門壽量の久遠實成の實

佛を説玉ふ(是三)に譬ふるあり本門の妙法蓮華經の功徳を  
 本門十四品別しては壽量品に正しく説明し玉ふ此時にこ  
 ろ爾前迹門の權佛權果に久遠の本壽を備へ十界皆悉く眞  
 實の成佛を遂させ玉ひぬれ是故に如來壽量品に云く然我  
 實成佛已來甚大久遠云云又如來如實知見三界之相無有生  
 死者退若出亦無在世及滅度者と演玉ふ此意は釋迦如來今  
 日中天竺に出世ましく三十の歲始て成佛し玉ふと爾前  
 の經々並に法華經の迹門十四品迄に説玉ひつるが唯假の  
 方便にして實は甚大久遠の昔に佛とあらせ玉ひて常住不  
 滅の佛にて在けり其實の佛の悟りの御眼より吾等衆生の

當位を知見し玉へば三界六道の苦患艱難も亦く凡夫外道  
 の迷も亦く聲聞緣覺の悟もなし誠に本覺本有とて始も亦  
 く終も亦く無作三身常住不變の佛跡にて有けるよと説せ  
 玉ふ經文なり是を本門の妙法蓮華經と申し亦は事の一念  
 三千發迹顯本久遠實成の一大事とも申すなり此壽量品の  
 妙法蓮華經の功徳を少しつゝ別ちて或は華嚴經とも阿含  
 經とも念佛とも眞言とも禪とも律とも五戒とも十善とも  
 仁義とも忠孝とも成申すあり斯ては如來一代の聖教を始  
 どして一切衆生卵生胎生濕生化生(第二號廿紙に出す)等の  
 動靜語默等に至るまで皆此壽量品の題目の働きにて不

ける是等の一大事は唯此壽量品にのみ説玉ひてあるを天台大師は壽量一文正明本迹とは釋し玉ひぬ又此二乗作佛久遠實成の二の一大事は八万法藏十二部經の肝心にして此法華經より外には一代經にこれなき法門なり故に妙樂大師は遍く法華已前の諸經を尋ぬるに二乗作佛と久遠實成なしと仰せられたりされば次下の分別功德品には此壽量品にして一切衆生の悉く佛になりたる事を説せ玉ひぬ妙樂大師又曰開迹顯本皆入初住故云作佛云云此壽量品にして皆佛になりたりと申す文なり又高祖大聖人も(當躰義抄に)眞實の斷惑證理は壽量の一品を聞時ありと判じ玉へ

り(佛の在世に壽量品を聽聞し玉へる大衆は皆是菩薩にして悉く一生二生乃至八生に成佛せさせ玉ふ事を分別功德品に委しく説玉ふ然るに吾等は宿緣薄くして世尊に後れ滅後末法の今日に生るゝと雖も忝あくも高祖の末弟に列り本門の正義を信ずる上は凡夫肉身の當位さながら菩薩の行業にして唱題の功德は在世聞品の利益と少しも變る事あり故に高祖觀心本尊抄に在世の本門と末法の初は一同に純圓あり但し彼は脱益此は下種益あり彼は一品二半此は但題目の五字ありと判じ玉へり意は在世と今日と時こそ變れ共に本門壽量品にして成佛すべしとありされば

又當牀義抄には正直に爾前述門を捨て但法華本門を信じ  
 南無妙法蓮華經と唱ふる人は平生不毀の淨土に居し其身  
 即ち無作の三身にして本門壽量の當牀蓮華佛とは日蓮が  
 弟子檀那等の中の事ありといへり(取意)仰て信ずべし伏し  
 て貴むべし爾前述門の高貴の大菩薩と雖も眞の成佛得道  
 は本門に限れり併し開覺の遲速は信心の厚薄によるされ  
 ば吾等此本門の正流を濁さず餘行を雜えず一心に受持し  
 堅固の志に住して唱題せる信行者あらば一生成佛疑ひな  
 きものあり故に高祖も今法華は速疾頓成にして下根の行  
 者も尙一生の中に妙覺の位に入ると判じ玉へり下根の行

者とは法華本門の題名計りを唱ふる行者の事あり況て時  
 々法義を聽聞して其義理を悟り或は人を勸めて聽聞せし  
 め或は他の爲に隨力演說し若くは觀念觀法する者をや是  
 等の中根上根の行者と名づく同じ日蓮が弟子檀那と名乗  
 る人の中にも信心薄うして或は述門に心を傾け或は題目  
 に餘行を雜え或は彼も此も勝劣淺深あしあんど意得て修  
 行する時は甚宗祖の本意に背き不信謗法の者とあるあり  
 故に宗祖は我弟子等の中にも信心薄淺者は臨終の時阿鼻  
 の相を現すへし其時我を恨む可らずと宣玉ふ又云法華經  
 に二經あり述門と本門となり本迹の相違は天地水火の違

目なり乃至彼は迹門の一念三千此は本門の一念三千あり  
 天地遙に殊あり殆ど御臨終の時まで御心得あるべし云云  
 いかにも本門の大信を起し無始已來の生死妄想の繫縛を  
 今生限り切斷して必ず一生成佛の本懐を達せんと深く心  
 懸へきあり

明治二十年十月十日御届  
 同年同月出版

(定價金二錢)

新潟縣平民 編輯兼出版人 宮島慶明

東京赤坂青山北町  
 四丁目七十一番地

東京本郷本妙寺中 發行所 教勵會

東京本郷區菊阪町  
 八十二番地

印刷所 秀英舍  
 東京々橋西紺屋町



故日修聖人著

法の道志るべ 第九



教勵會本部

東洋書局

(昭和十一年)

第七宗祖の正義を尋ねて題目肝要の旨を知む(續前)

又曰華嚴乃至般若大日經等は二乗作佛をかくすのみなら

ず久遠實成を説かくさせ給へり此等の經々に二の失あり

一には存行布故仍未開權(行布とは行は行列とて縦に先空

次假後中と行列するところ之布は布措とて横に聲聞緣覺

菩薩佛と布措するところにて人法各別にして權の空假即

はち實の中道ならず迷の衆生即ち悟の佛にわらず故に

權即是實と開會すること能はずとて迹門の一念三千をか

くせり二には言始成故尙未佛迹(始成とは世尊三十の時始

めて成佛すと説玉ふをいふ所謂華嚴經の始成正覺の文阿

はじめては正覺の

合經の初成道の文大集經の如來成道始十六年の文淨名經の始座佛樹力降伏於四魔の文大日經の我昔座道場場の文仁王經の二十九年の文等は皆始成の言なる故に未だ垂迹の月影を拂ふことを得ずとて本門の久遠をかくせり此等の二の大法は一代の綱骨一切經の心髓あり迹門方便品には一念三千二乗作佛を説て爾前二種の失一を脱たりしかりといへどもいまだ發迹顯本せざればまことの一念三千もあらはれず二乗作佛もさだまらず猶水中の月を見るがごとし根なし草の波の上に浮るにたり本門にいたつて始成正覺をやぶれば四教の果(藏)通二教の見思斷の佛別教の

十二品の無明を斷ずる佛圓教の四十二品斷の佛これを四教の果といふをやぶる四教の果をやぶれば四教の因やぶれぬ爾前迹門の十界の因果を打やぶつて本門十界の因果をときあらはす是即本因本果の法門なり九界も無始の佛界に具し佛界も無始の九界に備ひて眞の十界互具百界千如一念三千なるべし云云(開目抄上卷)此祖判の如くあれば我等の惡業煩惱(一號十二紙已下に出す)の其儘が無作三身(三身のごとは第七號三紙に出無作三身とは本來本有にて無而忽有の化身にもあらず又主宰者の土もて作るにもあらず非如非異の法性無始無終の實體なりもし與ふる則



の爾前の圓佛と述門の佛を無作三身といへども奪つて論ずる則の本門壽量の教主のみ無作三身の實佛といふの佛體なりさるによりて此壽量品の御題目を信受し奉る當所がはや本地久成の悟にてこゝを即身成佛といふなり若此壽量品の南無妙法蓮華經にましまさずんばいかの後生を願ふとも往生成佛すること能はず水中の月の實なきが如く魂もなき死人のやうにてこれあるべきあり此故に大聖人も一切經の中に此壽量品ましまさずば天に日月あく國に大王なく山河に珠あく人に神のなからんがごとしと判じ給へり(開目抄下卷)されば一部八卷二十七品はみなこれ

壽量の一身なり手足なり臣下あり萬民なり一字一點も皆壽量品の南無妙法蓮華經の御神の力用なれば疎かにすべからず故に一字一點も捨る人あれば千萬父母殺罪にも過たりと判じ玉へり(兄弟抄)されば釋尊も此南無妙法蓮華經の爲にこそ出世成道まします斯の如き尊貴の妙法蓮華經にてましますせば佛なほ彌勒。藥王。觀音。勢至等の述化他方の大菩薩にも授與し玉へず道暹法師(支那天台山の六祖妙樂大師の門下あり)の法是久成(壽量品の題目)の法ある故に久成の人(本化上行等の菩薩)に付屬すと釋したまへるこれなり爰に釋尊の御慈悲廣大あるより滅後末代の我等が如き

貪・瞋・癡の三毒強盛の衆生を憐み玉ひて本地久成の高貴の  
 御弟子上行無邊行等の大菩薩を召出し此本門壽量の南無  
 妙法蓮華經の五字七字を授與へて我等が佛に於る種とは  
 かし玉ひぬ故に大聖人の曰く遣使還告の地涌(本化)の上行  
 等涌出品に於て大地より涌出給ふ故に地涌の菩薩といふ  
 なり是好良藥は壽量品の肝要名體宗用教の南無妙法蓮華  
 經是なり此良藥をば佛猶迹化(彌勒文殊等の菩薩)に授與し  
 玉はずいかにいはんや他方(觀音勢至等の他方)より來り給  
 ふ菩薩をや唯地涌千界(地涌の菩薩)の數千世界微塵の如  
 し故に千界といふを召て是を讓與へ玉ふ云云(觀心本尊抄)

又曰一念三千を知ざるものには佛大慈悲を起して妙法五  
 字の袋の内に此珠をつゝみ末代幼稚の頸にかけさしめ玉  
 ふ云云(觀心本尊抄)是を以て吾祖大聖人佛の御使としてこ  
 の日本國に出現し玉ひ是好良藥の南無妙法蓮華經の五字  
 七字を以て我等衆生に與玉ふに元品の無明(煩惱)を大分し  
 て見思塵沙無明の三種とす初に見思とは見惑の八十八使  
 思惑の八十一品是則はち界内二乘の斷ずる煩惱なり次に  
 塵沙とは煩惱の數無量にして塵沙のごとし故に塵沙とい  
 ふ是則はち界外別教地前の菩薩の斷ずる煩惱なり次に無  
 明とは中道法性の明を闇まする煩惱なる故に無明といふ

其數總じて四十二品あり是即ち別教の初地已上圓教の  
 初住已上の菩薩之を斷ずさて元品の無明とは等覺深位の  
 大薩埵に障をあす煩惱なり然るに未斷見思の我等亦釋尊  
 高祖の大悲に依り妙法口唱するからは臨終の夕には如閻  
 得燈の大燈明は生死長夜の闇を照し刀尋段壞の大利劍は  
 元品の無明を斷ずる故に之を防ん爲に魔王障をあす此時  
 退轉するあかれ臨終の一念は多年の行功によるある大魔  
 王のはからひとして或は領主地頭(北條時頼。陸奥守重時。宿  
 谷奉行光則。東條景信等)の身にいり或は念佛眞言禪律等の  
 法師(良觀。行敏。聖一。道阿彌等)の心に移り種々に怨をなし機

様に罵しり誘り二度一度は弘長元辛酉年五月十二日豆州  
 伊東の浦へ一度は文永八辛未年十月十日佐州塚原へ(まで  
 遠流し結句は頭を刎んとし)文永八辛未年九月十二日龍口  
 頸座)けれども高祖の御慈悲強盛にして不惜身命の大願を  
 發し死身弘法の弘誓を立て終に廣宣流布の御志を遂玉ひ  
 ぬ誠まことに我等衆生の爲にかくまで大難を忍玉ひぬることの  
 辱かたじけなさよかゝる大慈悲のまじまます本化の大菩薩の末弟とあ  
 り其正流を汲奉ること實に優曇華(梵語此には靈瑞華とい  
 ふ三千年に一度現ず現する時金輪王出故に靈瑞華といふ)  
 に逢よりも珍めづしく一眼の龜の栴檀の浮木の孔に値る(海底

一盲龜あり甲は寒く腹は熱し甲の寒きを日光にあたゝ  
 め腹の熱きを栴檀の浮木の穴に入てひやさんと宿願の故  
 に偶海上に浮出希に浮木にあふとも栴檀木にあらず假令  
 檀木にあふとも恰好穴あらずんば腹の熱を冷すに由さし  
 況んや業眼の哀しさに希に檀木をみるも木は東へ龜は西  
 へ容易に之に乗ずる能はず茲譬の意は一眼の龜とは迷盲  
 の我等衆生海とは六道生死の苦海海底とは三途の底海上  
 とは希に人中に生る他の浮木とは爾前積教栴檀とは法華  
 經の能穴にいとほは地涌の菩薩にあふて感應道交の時ち  
 り若信心を疎かにせば設ひ地涌の菩薩の應の穴にあれど

も之に乗ずべき感の眼盲へたる故に入熱の腹の熱も八寒  
 の甲の寒きも治する能はず木は南へ流れ龜は北へ泳がど  
 どし悦にもこへたりければ我等愚輩此治平の御代に生れ  
 彼弘安の古昔を傳へき、高祖の大小の難に値玉へる大慈  
 大悲を惟へば若は寒熱風雨の難もしは多病貧賤の苦みを  
 受るとも少しも愁る意なく金銀財寶にもおぼれず妻子眷  
 屬にもほだされず刀杖の難に値水火の責を被るとも身命  
 をも惜まず是壽量の妙名を信じ奉り往生成佛をもし三寶  
 先師の大恩をも報じ國王主君の惠をも謝し父母先祖をも  
 回向し參らせ法界の衆生をも濟度し給んこそ本懐あるべ